
好きになてもいいですか？

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きになつてもいいですか？

【Zコード】

N4135U

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

行きつけの店で知り合った彼女に突然告白された。これって運命の出会いなんだろうか？それとも…。

第1話 好きになつてもいいですか？

「好きになつてもいいですか？」

行きつけの店で知り合つた女の子と帰りが一緒だった。
一人つきりになつた時に彼女が言つた。

「僕でいいの？」

「はい！」

「いきなりだね」

「私は前から知つていたわ」

そつと手をだすと、彼女も自分の手を添えてくれた。

分かれ道…。

「僕は…」

「私はこっち

でも、なかなか手を離すことができない。

「おやすみ」

僕が言うと、彼女はせつと手を離し、代わりにキスをしてくれた。

「おやすみなさい」

第2話 運命の出会い

まさか謝ってくれるとは思わなかつた。
そつさんの“おやすみ”のキス…。

家に帰つてボーッとしていたらメールが来た。
彼女からだ。

『今日の出会いは運命だよ…』

ボクはちよつと『キッ』とした。
とつあえず返信。

『そうかもね』

そのまま数日が過ぎた。

なぜだかあの時のキスが忘れられない。
すると、また彼女からメールが来た。
『どうして連絡してくれないの？』

すぐに返信した。

『家庭がある人に気安くできないう

そう、彼女は人妻。

第3話 悪魔の誘惑

それからしばらく彼女のことは忘れていた。
彼女の方からも連絡はなかつた。
もう、彼女の顔すら覚えてない。
でも、あの唇の感触だけは忘れられない。

仲間内での飲み会の帰り。

僕は一人で店を出た。

急に人恋しさを覚えた。

何気なく携帯を手に取る。

無意識に指が動いていた。

『遊ぶ？』

送信。

彼女からすぐには返信があった。

『今どこですか？』

僕は今いる場所を告げた。

歩いてくる彼女を見て思つた。

運命は変えられないのかもしれない。

第4話 一人きり

彼女は大きめの帽子を深くかぶっている。顔は見えなかつたが、雰囲気ですぐに彼女だと分かつた。

「今夜はとても素敵だね」

思つたことを素直に言葉に出来た。

口べたの僕が。

なんだかおかしい。

酔つているせいか…。

「どこに行く？」

「カラオケがいい」

カラオケなら通りの向かい側にある。

「よし！決まりだ」

僕が歩き出すと、少し後ろをついてくる。

人目を気にしているのかな…。

彼女がとても可愛く思えた。

そして、個室に一人きり。

第5話 待ちぶせ

カラオケボックスだとはいって、密室に一人きり。健全に歌を唄う気分になれないのは当然かな…。

店員が飲み物を運んで来た。
取り合えず乾杯！

僕は彼女に『待ちぶせ』をリクエスト。

彼女のイメージにぴったり。

歌っている彼女の横顔に見とれる。

歌い終わった彼女が僕の方を向く。

彼女の唇がすごく近い。

ドキドキ高鳴る心臓の音が彼女に聞こえそうで恥ずかしい。

けれど、目をそらすことさえできない。

そして、彼女がそっと目を閉じた。

第6話 長いキス

軽く唇に触れる。

いつたん離れると彼女がうつとりした表情で僕を見つめている。

再び唇を合わせると、彼女は僕に体を寄せてきた。

僕は思わず、彼女を抱きしめた。

彼女の胸のふくらみを感じて自分を失いそうになった。

長いキス…。

舌が絡み合う。

しかし、突然、彼女が顔を遠ざけた。

「出ましょっ…」

「えっ？」

「ここだと撮られているわ」

彼女が言いたいことはすぐに分かった。

僕も同じ気持ちだった。

店を出て、路地裏へ。

そこは…。

第7話 無邪気な寝顔

空いている部屋は二つあった。

最上階の部屋を選ぶ。

エレベーターの中で軽くキス。

部屋に入るとベッドに腰掛け抱き合つ。キスをしながら彼女の服を脱がす。

「あなたも脱いで」

彼女の言葉に促され、ボクも裸になつた。

「シャワーを浴びる？」

彼女は首を横に振つて僕に体を預けた。僕達はそのまま一つになつた。

明け方目を覚ますと、彼女はまだ眠つている。

昨夜の激しさが嘘のような無邪気な寝顔。

「運命か…」

僕は煙草に火を付けた。

第8話 帰り道

「朝になっちゃったね。家は大丈夫なの？」

「ええ。昨夜は実家に泊まることにしているから」

一人でホテルを出ると、外はすっかり明るくなっていた。

「さて、どうする？」

「あなたは？」

「僕は君と手をつないで歩きたいな」

「いいよ」

そして、彼女は恥ずかしそうに手を差し出す。

楽しい時間はあつという間だ。

そろそろ人目を気にしなければいけない。

「じゃあ、この辺で」

彼女は頷いて目を閉じる。

僕はそつと彼女の唇にキスをした。

第9話 彼女の日常

地元の商店街で彼女を見かけた。
子供と一緒にいた。

知らないふりをした方がいいのか迷つた。
すると、彼女の方から会釈をした。

ボクも軽く頭を下げた。

あんなに大きな子供が…。

そんな風には見えなかつたけど…。

初めて会つた時の彼女の言葉を思い出した。

「私は前から知つていたわ」

僕は彼女のことほとんど知らない。

だけど、もうそんなことはどうでもいい。
彼女が隣にいないと不安になる。

携帯を手に取る。

『今度いつ会える?』

第10話 彼女のことが頭から離れない

『今度いつ会える?』

彼女からの返事はなかつた。

どうしたんだろう…。

何かあつたんだろうか…。

いてもたつてもいられない。

心臓の鼓動が激しく波打つ。

彼女のことが頭から離れない。

「ねえ、今度の日曜日は休みかしら?」

妻がたずねる。

「休みだよ」

「同窓会なの。夕飯の支度頼めるかしら」

「いいよ

その後、彼女からメールが来た。

『日曜日の夜ならいいよ』

日曜日。

夕食の支度をとつと終え、僕は待ち合わせ場所まで走った。

第1-1話 接点

居酒屋の個室席。

向かい合って座る。

隣で寄り添ってくれるのもいい。

でも、僕は彼女の顔が見られるから向かい合って座る方がいい。

今日は彼女のことがもっと知りたい。

「奥さんからよく話を聞いてるの」

チームは違うけど、彼女もバレー・ボールをやっているということだった。

地元のチーム同士、交流があるのは当たり前。

「でも僕とは会ったことないよね」

「何度かあるお店で会っているのよ。」

「そんな…。」

まったく気がつかなかつた。

第1-2話 優しいダンナ

「陽子のダンナって、優しくていいよね」

バレー・ボールの合同練習が終わって一杯やっている時によく聞く会話。

私のダンナは働いてお金を入れるだけ。
夫婦の愛情はない。

陽子さんのダンナさんって、どんな人なんだろう…。

後日、飲み会をしていると二人連れの男のお客さんがやってきた。
一人は顔見知りだった。
二人は楽しそうに話している。
私はもう一人の人がとても気になつた。
「陽子が…」
もう一人の人の口から聞こえた。
この人！

第1-3話 胸の鼓動が加速する

私は気が付いたら席を立っていた。

「茂さん、こんにちは」

「なんだ、いたの？」

「はい。女子会で」

そんな会話をしていると、彼がちらりと私の方を見た。

「友達」

茂さんが彼を紹介してくれた。

彼は軽く会釈してくれた。

「奈津子」

仲間から呼ばれ、私は席に戻った。

でも、私の席からは背中越しで一人が見えない。
すると、他の仲間が茂さんに声を掛けた。

「ねえ、一緒に飲みましょうよ」

私は胸の鼓動が一気に加速するのを感じた。

第14話 募る想い

私は思わず一人の方を見た。

茂さんは手をあげて応えてくれている。
そして、茂さんが彼に話しかけている。

二人がグラスを持つて立ち上がった。

『やつたつ！』

二人がやって来ると、仲間たちは一人に席を開けた。

私から一人おいて茂さん、彼はその向かいに入った。

茂さんのおかげで飲み会は盛り上がった。

私は彼と話したかったけど、何も話せずには女子会は終了。

その後、同じ店で何度も彼を見かけた。
その度に思いは募るばかりだった。

第15話　きつかけ

茂さんから電話があった。

『カラオケやつてるんだけど、どうへ。』

もしかしたら彼も一緒にいらっしゃる?

「誰がいるんですか?」

『この前、一緒にいた友達と信ちゃんは地元の議員。

「いいんですか?」

『来る?』

「はい、行きます」

どうしよう、なんだかドキドキしてきちゃった。

「今、友達呼んだから」

そう言って茂は俊哉を見た。

「誰?」

俊哉は聞いたが茂はニヤニヤするだけだった。

それからしばらくして女の子が一人入って来た。

第16話 彼女から目が離せない

「前に会つたろ？」

茂が僕に彼女を紹介した。

「そう？」

僕は全く覚えていなかつた。

「まあ、いい。なつちゃんここ座りな」

茂に促され、彼女は僕の横に座つた。

茂が彼女に歌うよつ勧める。

彼女は頷いて曲を入れる
すぐに入江口が流れる。

レベッカ。

彼女が歌い始める。

僕は鳥肌がたつほど驚いた。

『上手い！』

彼女から田が離せなかつた。

しばらくして、茂と信ちゃんは次の日早いからと言つて先に帰つた。

僕と彼女だけがそこにいた。

第17話 彼女の笑顔がたまらない

彼女が水割りを作ってくれる。
何気ないしぐさにもドキッとする。

「歌わないんですか?」「

少し考えてからリクエスト。

GLAY。

歌いながらも彼女の視線が気になる。

「お上手ですね」

彼女が拍手しながら言つてくれた。
照れくさいけど嬉しい。

「名前を聞いてもいい?」

「浅井です」

「僕は…」

「川村さん」

「えつ?」

「川村さんは有名ですから」

そう言う彼女の笑顔がたまらない。

「アドレス交換しましょう」

彼女が携帯電話を差し出す。

第18話 真は特別

赤外線でお互いのデータを交換。

「奈津子って言つんだ」

「はい。“なつちゃん”って呼ばれます。」

「なつちゃんか…」

ちょっとイメージが違うと思つた。

「僕は“みいこ”って呼んでもいい?」

「みいこ?」

「子猫みたいに可愛いから」

恥ずかしそうに照れ笑いする彼女。

「私は“トシさん”って呼んでもいいですか?」

「いいよ」

「じゃあ、私もOKです。でも、トシさん、誰にでもやつぱり

いるんじゃないですか?」

「君は特別さ」

第1-9話 彼といられるだけで…

店は一人の貸し切り状態。マスターが「そろそろ終わりだよ」と声をかけた。時計を見ると、深夜の2時。

「じゃあ、帰ろうか?」

「はい」

こうして一人で店を出た。

一人で歩いた。

思い切って告白しそう。

そして、思いを伝えた。

奈津子は俊哉と親しくなれたことがとてもうれしかった。

そして、今も俊哉と一人でいられる。

居酒屋の個室で向かい合つて。

奈津子は俊哉の隣に寄り添つて座りたかった。でも、彼といられるだけで満足だった。

第20話 彼のセリフは嫌みがない

彼は口数が少ない。

私の話を微笑みながら聞いていることが多い。

「トシさんも何か話して下さい」

少し困ったような顔。

「僕は楽しそうな“まいこ”の顔を見ているだけで幸せなんだ」
歯が浮いてしまいそうなセリフ…。

でも彼が言うと嫌みがない。

私は恥ずかしくて下を向いた。

「どうしたの？」

彼が聞く。

「だつて…」

「せつかく可愛い顔をしているのにもつたいないよ
顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。
益々顔をあげられない。

第21話 やつぱり可愛い！

彼女が下を向いたまま動かない。

「どうしたの？」

再度聞き直す。

「だつて…」

「だつて、どうしたの？」

「恥ずかしいよ」

「なんで？」

そう聞くと彼女はよつやく顔をあげた。

「だつて恥ずかしいよ」

「なにが？」

「私、そんなに可愛くなんかない」

上目使いに僕の方を見る。

顔が少し赤らんでいるよつだ。

やつぱり可愛い！

「そんなことないよ」

僕は身を乗り出して彼女の顔を上向けた。

まわりに人がいないのを確認し、そつとキスをした。

第22話 きっと君のせい

彼の唇が私の口を塞いだ。

一瞬だつたけど、とても長く感じた。

この人はどうしてこんなことが出来るのかしら。

こんな人初めて…。

それから珍しく彼の方から話を始めた。

「驚いた？ 僕も驚いた」

彼は今まで陽子さん以外の女の人と付き合つた経験がないという。それなのに、こんなにプレイボーアみたいなセリフや行動を取ることに驚いているという。

陽子さんと付き合っているときにはこんなことなかつたらしい。

「きっと君のせいだね」

第23話 彼の名前

彼の名前だけは以前から知っていた。

上の子が小学校に入学した年に彼はPTAの役員だった。

夏祭りの花火大会で彼がセッティングした設備はPTAの行事にしては本格的すぎるものだった。

それをやつたのがすべて彼だったことはあとで知った。

PTAのバレー・ボール部に誘われた時、陽子さんがいた。

もう6年なので、PTAは今年で卒業だと聞いていた。

そして、彼が陽子さんのダンナだということもその時知った。

もう卒業なんだ…。

第24話 彼の顔は

翌年の夏祭りの設備もすぐかつた。

きっと彼だわ

そう確信した。

卒業しても手伝ってくれているんだ。

私は腕章をして忙しそうに走り回っているお父さんたちを観察した。
どの人だろう…。

結局分からず仕舞だつた。

その後、夏祭りは規模を縮小し、これまでのような設備は必要なく
なつたらしい。

彼の顔を確かめられなかつた。

それから数年経つた。

彼のことはいつの間にか忘れていた。

そして、親友に誘われて私もクラブチームに入つた。

第25話 彼女しか見えない

「きつと君のせいだね」

彼女の顔が更に赤くなつた。

キスのせいなのか、今の言葉のせいなのかは分からぬ。

「そんなにからかわないでください」「
今度は少し口を尖らせて彼女が言つ。
そんな表情も可愛い。」

「イヤなの？」

「はい！ からかわれるのはイヤです」

今度は少し困った顔。

僕はちよつと意地悪してみたくなつた。

「じゃあ、付き合つのをやめる？

「ダメエ！」

そう言って彼女は僕の手を握りしめた。
もう僕には彼女しか見えない。

第26話 真が誰かに取られないか心配だ

「バカだなあ！　冗談だよ」
彼が言つ。

私は我慢できなくなつて彼の隣に座つた。
体を寄せて彼の手を取る。
両手で包み込むように握りしめる。

「可愛いなあ」
彼がつぶやく。
「そんなことない……」

そう言いかけた時、また彼が私の唇を塞ぐ。
今度はさつきより少し長いキス。

しばらくして彼が呟いた。

「君は可愛いから心配だよ」
「えつ？」
「誰かに取られないか心配だ」
一瞬だけ見せた彼の不安そうな表情。
「そんなことないよ。　私だつて……」

第27話 彼が欲しくてたまらない

「私、だつて心配だわ」

そう、彼はとても優しい。
特に女性には。

陽子さんたちが話しているのを聞く限り。

彼女たちは口を揃えて言つ。

『陽子のダンナは素敵よね』

陽子さんは笑つて答える。

『ダメよ！ あげないからね』

そんな会話を聞きながら、私は彼が欲しくてたまなくなっていた。

「私もトシさんが他の女人と仲良くしているのを見るのはイヤー！」

彼は笑つて頷く。

「そんなことはしないさ」

『陽子さんとも…』

私は心の中で呟いた。

第28話 エリートが

私が入ったチームは陽子さんのチームとは別のチーム。
彼のことは忘れていたし、純粹にバレーボールが楽しかった。
弱小チームだけどやりがいがあった。

今思えば結果オーライ。

同じチームだつたら今は陽子さんの顔をまともに見られない…。

「今度PTAの地区大会があるんだよね？」

「はい」

「応援に行ってあげるよ

と彼。

嬉しい。

そんな時、陽子さんがPTAのチームにマネージャーとして入ってくれることになった。

どうしよう…。

第29話 嬉しいけれど素直に喜べない

陽子さんは一人の子供が通っていた9年間、この小学校のPTAチ
ームを引っ張ってきた人。

私たちにとつては雲の上の存在。

入ってくれるのはありがたいこと。

でも、今の私は動搖している。

何とかごまかさなくちゃ。

大会当日、彼と茂さんが応援に来てくれた。
嬉しいけれど素直に喜べない。

彼はベンチの陽子さんを見かけて声をかけている。

夫婦だもの。

仕方ないよ。

そう思つても冷静でいられない。

集中しろ！

そう自分に言い聞かせる。

第30話 複雑な想い

最初の試合は2・0から逆転負け。

緊張とベンチが気になつて上手くトスがあげられなかつた。

「惜しかつたね」

試合後に彼が声をかけてくれた。
嬉しいけれど、怖かつた。

彼と私が顔見知りだということを陽子さんには知られたくない。
幸い、陽子さんの姿はなかつた。
私はホッとした。

「次もがんばつてね」

「はい」

「陽子がいたね」

「マネージャーで入つてくれていてるんですね」

「ふーん…」

夫婦なのに知らない?
私はなぜか嬉しくなつた。

第31話 彼女は誰よりも輝いていた

「コートでトスをあげている彼女はとても輝いて見えた。この会場にいるどの女性よりも。もちろん、陽子も含めて。僕はますます好きになつた。

「あいつ、今日はばしいぶん緊張しているなあ」試合を見ながら茂が言つ。
「彼女のことだ。ボクにもそれは分かつた。きっと陽子がいるせいだろう。…。

2試合目は優勝候補の学校といい勝負をした。でも最後は突き放されて2戦2敗。準決勝には進めなかつた。

会場を後にするとき彼女が僕を見ていた。

第32話 今どうしていますか？

彼が会場を去つたら、急に寂しくなつた。
試合後のミーティングは何も頭に入らなかつた。

「…ねえ、聞いてるの？」

陽子さんの声。

「具合でも悪いの？」

「大丈夫です…」

このあとは打ち上げ。

陽子さんも参加する。

「なつちゃん、具合が悪いなら無理しなくてもいいわよ」
陽子さんが心配してくれた。

「すみません。じゃあ、今日はこれで「
みんなと別れると、すぐに携帯を取り出した。
彼の名前を探す。

『今どうしていますか？』

送信…。

第33話 いつものシャンプーの香りが心地いい

僕は家に戻つて夕食の支度をしていた。

そこにメールの着信。

彼女からだ。

『今どうしていますか?』

『家で飯の支度』

また彼女からすぐに返信。

『出られますか?』

『みいこはこれから打上げでしょ、う?』

『具合が悪いと黙つて断りました。会いたい……』

僕も会いたかった。

電話で場所と時間を指定した。
適当に支度を済ませ家を出た。

少し遅れて彼女はやつて來た。

そして、僕にしがみついてきた。

いつものシャンプーの香りが心地いい……。

第3・4話　頭の中の映像

俊哉の頭の中をテレビの画面に例えると、こんな具合かもしれない。

普段はもちろん奈津子の映像。

仕事の時なども、必ず子画面が出ていて、そこにはいつも奈津子が映っている。

俊哉はハイボールをクラッシュアイスで、奈津子はライムサワーを頼んだ。

「もっと会えればいいのに……」

物憂げな表情で彼女は言つ。

それは僕にとっても同じこと。

あの日以来、彼女が隣にいることに違和感さえ覚える。

「じゃあ……」

僕はあることを提案した。

第35話 提案

「じゃあ、ソフトをやってみない？」

僕が言つたのはPTAのソフトボールのことだ。

僕は卒業しているけれど、僕が立上げたチームなので今でも顔が聞く。

ソフトをやっていれば、今よりはずっと会う機会も増える。

「でも、ウチはまだ入学していないわ」

「来年だろ？？」

「そうだけど……」

「じゃあ、体験入部でどう？？」

「でも、トシさん紹介されるのは……」

彼女の言いたいことはすぐに分かつた。
僕との関係を疑われたくないのだろ？

第36話 緊張の初対面

秋の地区大会が雨で流れた。

その日は昼から宴会になった。

そして、二次会でカラオケに移動。

僕は彼女にメールした。

『チームのみんなとカラオケにいるけど来ない?』

『行きたいけど行きづらいよ…』

『大丈夫だよ』

『じゃあ、茂さんから…』

茂とは顔なじみなので、その方が自然だと彼女は言った。

僕は茂に話してそうしてもらつた。

『今、店の前にいます』

『早くおいで』

緊張した顔で彼女は入つて來た。
チームメイトと初の「」対面だ。

第37話 アイドル誕生

茂が手招きすると、彼女は茂と僕の間に座った。
その瞬間、彼女に注目が集まつた。

「だれ？」

みんな、可愛い“みいこ”に興味津々。

彼女を知っている者もいたが、ほとんどは初対面。
あらためた紹介はせず、自然の流れで一緒に飲んだ。

次第に彼女の緊張もほぐれてきたようだ。

彼女がカラオケを披露すると、みんなが彼女の歌に聞き惚れた。

その後、僕は機会があれば彼女を呼んだ。

そして彼女はチームのアイドル的存在になつた…。

第38話 幸せな気持ち

俊哉がソフトボール部を支えているのは前から知っていた。長女が入学したらソフト部に入るつもりだった。俊哉に近づきたかったからだ。

しかし、その前に願いが叶つた。
それで十分だった。

改めて俊哉からソフトボールに誘われたのは嬉しかった。
他のメンバーもいい人ばかりだ。

「楽しくなりそうだわ」

奈津子は幸せな気持ちだった。

そんなところに俊哉からメールが入った。

『今度、ソフトの忘年会やるからおいで』

トシをとつたら……。

第39話 そんなに簡単じゃないのよ

「トシさんつたら、いつも一方的なんだから」

奈津子は嬉しかった。

でも、素直に受け入れられない事情もある。

周りの目だ。

女性が外に出るといつゝとは、「ゴシップ好きのオバサン達の標的になりやすいのだ。

奈津子のように外から入っていた人間に対しては特にそうだ。

奈津子は俊哉に返信した。

『行きたいけど、行けないよ』

『大丈夫だよ！偶然会つたことにすればいい』

トシさんの気持ちは嬉しいけれど、そんなに簡単じゃないのよ……。

第40話 迷い

奈津子はなんだか落ち着かない。

そう、今日は俊哉たちが忘年会をやっている。

本当に行きたくて仕方がない。

「なあ、今日は出かけるんだろう? まだいいのか」

今日はダンナが子供達を見てくれることになつていてる。

「もう出ます

やつぱり」と、とりあえず家を出た。

そして、俊哉にメールしてみる。

『本当に大丈夫ですか?』

『大丈夫だよ! 不安なら迎えに行こつか?』

奈津子はまだ迷っていたが、既に会場の近くまで来ていた。
すると…。

第41話 必然的な偶然

私は迷いながらも、会場の近くまで来ていた。

ふと視線を上げると、彼が一歩一歩歩いて来るのが見えた。

「偶然だね」

彼はそう言って微笑んだ。

「買い物？」

そう言いながら、自分が持ってきたコンベニの袋を私の手に預ける。

「何を買ったの？」

そう言って袋の中を覗き込んだりする。

「とにかくで…」

そして、今度は私の手を引いて歩きだした。

会場に着くと彼はこう言った。

「タバコ買いに行つたら、なつかやんに会つたから連れてきた」

第42話 彼女がいないと上の空

僕は早く彼女に会いたかった。

忘年会は盛り上がりで、僕は上の空。
そんなとき彼女からメールが来た。

僕は居てもたつてもいられなくて店を出た。

コンビニで適当に生活用品を買った。

コンビニを出ると彼女が見えた。

僕は偶然を装つて声をかけた。

彼女を店に連れていくと、みんな歓迎してくれた。

僕は彼女に空いている席を指して座らせた。

そして、参加賞のスクラッチカードをこっそり渡した。
それから僕は自分の席に戻った。

第43話 不安

彼は店に着くと、参加賞だと言つてスクラッチカードを一枚出した。

「私はいいですよ」

私は遠慮して返そうとした。

「いいから！」

そう言つて彼は自分の席に戻つた。

「貰つときなよ。余つてるんだし」

先日知り合つた克也さんもそう言つので頂くことにした。

そして彼の方を見た。

私は心臓が止まりそうになつた。

彼の横に本部の女性役員が三人いたのだ。

私がここにいることをあの人達はどう思つかしい。
そう考えたら急に不安になつた。

第44話 僕がついているから

せっかく彼女を連れてきたのに離れているのは寂しい…。
自然と彼女の方に目が行ってしまう。
不安そうに、こっちを見ている彼女と目が合った。
理由は分かる。

「実は…」

僕は彼女を連れてきた経緯を説明した。

「ふうん…。 良かつたじやない」

本部の女性達が納得したかどうかは分からぬ。

「ちょっとじりじりめん」

そう言って、僕は席を立つた。

「私、やつぱり帰るよ」

「ちゃんと説明したから大丈夫だよ」

「でも…」

「僕がついているから」

第45話 頑張つてね

僕はしばらく彼女のそばにいた。

他のメンバーも彼女に話しかけ始めた。

彼女も少し安心したようだ。

そういうしているうちに女性役員の一人、吉田さんがやつて來た。

「ソフトやるのね」

「はい、来年から

「頑張つてね」

吉田さんは裏表のない人だ。

彼女とも自然に話してくれている。

彼女の表情も次第に和らいできた。

とりあえず安心だ。

しかし、向こうの二人は要注意だ。

その時、茂から声がかかった。

「トシ、そろそろ始めようか?」

第46話 お楽しみ抽選会

茂さんから声がかかると彼は私にウインクした。
何かの合図なのだろうか…。

「それでは今からお楽しみ抽選会を行います」
彼が抽選会の司会を始めた。

「お手元の…」

どうやらさつきのスクラッチカードを削ると景品がもりあがるよいだ。
みんな待つてましたとばかりにカードを削り始めた。

「やった！ 2等だ」

ヒロちゃんが真っ先に手をあげた。

「なんだよハズレか」

そんな声もちらほら。

「なつちゃんも削りなよ。1等出でないよ」

「でも…」

第47話 クリスマスプレゼント

克也さんはそう言つと、私のカードを取り上げて削り始めた。

「おっ！ 何か当たつてるかも」

「まさか…」

私は自分の目を疑つた。

そこには『特賞』と書かれてあつた。

「すげえ！ なっちゃん特賞だ」

克也が叫んだ。

みんなの目が一斉に私の方へ向く。

彼が頷きながら私の方へ來た。
賞品を持って。

「おめでとう！ クリスマスプレゼントだよ

そう囁いて彼はウインクした。

「早く開けてごらん」

私はそつと中を覗いた。
新品のグローブだった。

第48話　君はそういう運命なんだ

スクラッチカードは同じ種類のカード毎に売られている。

『ハズレ』以外は1枚ずつ混ぜる。

僕はその中から、『特賞』のカードだけ抜き取ってポケットにしました。

“みいこ”にこいつそり渡すためだ。

ソフトを始める彼女のためにグローブを買つた。

ただでは受け取らないと思ったので、抽選会で当てさせようと思つた。

「おめでとう！」

彼女はびっくりしていた。

その顔がまたたまらなく可愛い。

「どうして？」

「君はそういう運命なんだ」

第49話 強運

「なに、なに？」

克也さんが興味津々で私が受け取った包みの中を覗き込む。

「うわー！ すげえ

さつそく手にとつて、しみじみと眺めていく。

「これ、相当するでしょ？？」

彼は笑って頷いている。

私にはグローブの値段なんて分からぬけれど、安物ではないことは一目で分かった。

「2万くらいするんじゃないの」
克也さんは興奮している。

「えっ？ そんなに」

「なっちゃんは強運だね」

彼はサラッと言った。

「だけど……」

でも、嬉しい。

第50話 彼と一緒になら

抽選会が終わると女性役員三人は帰つて行つた。
ホツとした。

そのあとはカラオケタイムで盛り上がつた。

店を出たのが深夜3時。

「一緒に帰ろう」「う

彼が声を掛けてくれた。

「はい」

やつと二人きりになれる。

そう思つたら背後から声が…。

「俊哉さん、腹減らないっすか？ メシ行きましょっよ」
いちばん若いユウ君だ。

お願いだから断つて…。

「いいね！ なつちゃんもどう？」「う

「えつ？」「

「大丈夫？」

「はい…」

仕方ない。

でも彼と一緒になら。

第51話 私は主婦

結局、朝までファミレスに3人。
ちょっと、欲求不満。

家に着いたら彼からメール。

『朝まで君のそばにいられて幸せだつたよ
私もすぐに返信する。』

『私も楽しかったです。プレゼントありがとうござります』

少しだけ仮眠をとつたら私は主婦に戻る。

朝食はトーストにハムエッグ。

それから、サラダ。

温めたミルク。

休日出勤のダンナを送り出したら、掃除。
そして、昼食。

子供たちは冬休み。
一日中家にいる。

彼はどうしているかしら…。

第52話 相談したいことがあるんです

『相談したいことがあるんです。時間ありますか』
彼女からのメール。

年が明けて間もなくのことだった。

居酒屋のカウンター席。

嫌な予感がする。

彼女が口を開いた。

「実は…」

彼女がソフトを始めるということで子供達がグローブを貰ってくれ
たらしい。

どっちを使つたらいいか迷つて いるとい うのだ。

「それなら、子供たちに買つてもらつた方を使つべきだよ

「いいんですか？」

「もちろん！」

ホッとした。

別れ話でなくて良かつた。

第53話 ずっと一人でいられたいの

「よかつた」

彼は神妙な顔つきで言った。

「どうしたんですか?」「

「別れ話でも切り出されるのかと思つてた」

「そんなわけないじゃないですか」

「本当によかつた」

彼がホッとしているのがよくわかる。

そして彼は続けた。

「僕にはもう“みいこ”しかいないから」

そこまで私を愛してくれているのね。
なんだか胸がいっぱいになつてきた。

「私もトシさんだけですよ

私も彼以外の人は考えられない。

「ずっと一人でいられたらいいのにな」

第54話 こんな時に限って…

夕方から体がだるい。

家に帰つて、念のために熱を測つてみた。

39度6分。

インフルエンザかもしれない…。
食事も取らず布団に潜り込んだ。

陽子が帰つてきて事情を話した。

とりあえず、熱さましの薬を買って来てくれた。

やはりインフルエンザだった。

僕は家族と隔離された。

夕方、メールが入った。

彼女からだ。

『今夜、時間ありますか?』
なんで、こんな時に限つて…。

『たっぷりあるけど、会えない…』

第55話 会えない不安

『たつぱりあるけど、会えない
彼からの返信。』

えつ？

今までこんなことなかつたのに…。

嫌われたのではないか?
もしかして陽子さんにバレた?
不安でたまらない。

もう一度メールしてみよう。

『具合でも悪いのですか』

すぐに返事がきた。

『インフルエンザなんだ』

そんな！

でも、私にしてあげられる」とはない。
こんな時にそばにいてあげられないなんて…。

無意識に陽子に看病されている俊哉の姿が浮かぶ。
陽子さんかいなけば…。

第5・6話 彼の心配り

ダメ！

そんなことを考えてはいけないわ。

今は彼が早く治るように祈りましょう。

その後、彼から定期的にメールが入った。

『熱は下がったから心配しないで』

『医者の許可が出るまでもう少し待って』

私が心配しないように心配りしてくれている。

そんな時、娘の学校がインフルエンザで休校になった。
娘にも症状が出ていた。

診察したら反応が出た。

そして、私にも。

『もう、いつでも会えるよ

どうしてこんな時に…。

『「みんなさー…」』

第57話　久しぶりの彼の笑顔

『「めんなさい。　今度は私が……』

えつ！

仕方ない。

でも、まさか僕のがうつったのではないだろうな……。
こんな時にそばにいてやれないなんて。

あつ……。

彼女もそんな風に思つていたのかなあ……。

僕は彼女にメールした。

『“可愛いみいこ”お大事に！　ゆっくり休んで……』

彼からのメール。

『…治つたら美味しいものを食べに行こうね！』

1週間もすると私も完治した。

彼の職場の近くにあるイタリア料理のレストラン。
久しぶりの彼の笑顔……。

第58話 出会つのが遅すぎた

「大変だつたね。お互^{いに}」

「でもよかつた」

彼女のホッとした顔が心地いい。

「トシさんはこ^{うこう}うとこ^{うこう}で働いているんですね」

「会社は大したことないけどね」

「でも、大丈夫?」

「何が?」

「会社の人見られたりしたら…」

「地元で誰かに見られるよりはマシだろ?」

「そうですけど…」

「顔見知りに会つたら“妻”だと紹介するよ

「そんな、恥ずかしい…」

本当に出会つのが遅すぎた。

僕はそう思しながら、彼女の顔を見つめた。

第59話 一緒に帰りたいけど…

僕は店を出たところで彼女と別れた。
本当は一緒に帰りたいけど、電車の中では誰が見ているか分からな
いから。

家に帰ると陽子が既に帰っていた。

時計を見ると11時を回っている。

バーーの時はいつもこのくらいの時間になる。

「パパ、ご飯は？」

「食べてきた」

「寝る前にお米といでおこしてくれる？」

「いいよ」

「私も風呂入つてくるから」

そつ言つて陽子はバスルームに消えた。

携帯電話が震える。

彼女からだ。

『今日はまだいいわ』

第60話 そこにはいるのが彼だったら…

家に帰ると、子供達はゲームをしていた。
ダンナは風呾からあがつたところだった。

「今日の女子会どうだった?」

そんな言葉でも掛けてくれればいいのに。
ダンナは冷蔵庫からビールを出し、黙つて一人で飲み始めた。

『“可愛いみいこ”がそばにいたから僕は胸がいっぱいで何を食べ
たかも覚えていないよ…』

『彼からメールの返信。』

チラッと田那の方を見る。

そこに座っているのがトシさんだつたら…。
そう思つと、涙が溢れそうになつた。

第6-1話 緊張の初体験

『今度の日曜日に練習あるから、おいで』
『はい』

とつあえず、運動できる格好で家を出た。

着いた時にはもう始まっていた。

キヤツチボールしていた彼がすぐに気づいてくれた。

一日、練習を中断して彼がみんなを集める。

「紹介します。 今日から体験で…」

既に顔馴染みだとは言え、緊張する。

キヤツチボールで体を温めたら、ノックが始まった。
ノックをするのはイチローさん。

私の番が来た。

緩いゴロ。

取れた。

なんだか、気持ちいい。

第62話 いい感じ！

僕は彼女がノックを受けるところを見ていた。
運動は初めてではないので、そう心配はしていなかった。

イチローちゃんが緩いゴロを打つてくれたようだ。

ほー！

打球が緩いのもあるけれど、彼女は前に出てボールを取った。

「なつちゃんやるねえ！ 上手じゃない」

みんなが彼女を褒めまくる。

うん！ 確かにいい。

そして、フリー・バッティング。

僕がバツティングピッチャーをかつてた。

彼女が打席に入る。
自然ない構えだ。
表情もいい。.

第63話 嫌な予感

「あの子いいねえ」

練習後、一杯やりながらイチローが言った。

「川村さん、彼女どこで見つけてきたんですか？」
イチローが聞いてきた。

「陽子のバレー絡みで」

「本当に初めてなんですか？」

「ソフトはね」

「いやー、でも上手だなあ」

「どうやらイチローは彼女のこと気が気に入つたらしい。
イチローはバツ一の現在独身。

「今日はもう帰つたんですか？ 川村さん、誘わなかつたんですか
？」

「そりゃあ、主婦だからね」

何か、嫌な予感が…。

第64話 すぐに行きます

『練習どうだった?』

彼からのメール。

『楽しかったです。トシさんはまだ飲んでいるのですか?』
練習後はいつも夜中まで飲んでいると彼から聞いていた。
今日はダンナがいるので、これから出かけても大丈夫かな…。
そう思つて彼にメールした。

『これからカラオケに移動するけど来る?』

『誰がいますか?』

『茂君、キャプテン、イチローとボク』

イチローさん?

珍しいな。

イチローはカラオケに来たことがなかった。

『すぐに行きます』

第65話 そういうの? なの?

4人でカラオケに行くと間もなく彼女がやつて來た。

「あれっ? どうしたの?」

イチローがすぐ彼女に氣付いた。

「僕が呼んだ」

そして、彼女は僕の横に座つた。

「そういうことなの?」

イチローは少しがつかりしたようだつた。

「えっ? どういうこと?」

その会話を聞いていたキヤプテンの砂川が身を乗り出した。

砂川は最年長だが空気が読めない。

「何だつていいじゃん

茂がはぐらかす。

「川村さんも隅に置けないな
にやつくイチロー。」

第66話 こいつはヤバい！

「変な勘織りはするなよ」

彼女が歌つているときに僕はイチローに釘を刺した。

「川村さんの彼女には手を出さないよ」「み

そう言ってウインクするイチロー。

彼女が歌い終わって席に戻ってきた。

「初めて聞いたけど上手いねえ！」

イチローが拍手しながら彼女を褒める。

「イチローさんも歌つて下さい」

彼女がイチローにカラオケを勧める。

「僕は1曲しか歌えないんだ」

イチローが曲を入れる。

彼女の目が輝いている。

「こいつはヤバいかも…」

第67話 僕は僕

イチローはやたらと彼女に話しかける。
彼女もイチローと話をするのが楽しそうだ。

僕はちょっと焦っていた。
だけど、彼は彼。

僕は僕。

彼女が僕を好きになつたのはそれなりの理由がある。
しゃべって楽しいヤツは他にもいる。
そう思つて気を取り直した。

いつの間にか深夜2時。
「この辺で解散しよう」
茂が言った。

僕と彼女以外は違う方向へ帰つて行つた。

いつものように僕たちは一人で歩いた。
そして、いつもの場所でおやすみのキス。

第68話 彼はいつも気を使ってくれる。だけど…

『今日は楽しかつたです。 またお願ひします。』

送信。

彼にメール。

『無事に帰れたみたいだね。 家の方は大丈夫?』
彼からすぐに返信メール。

ふふ。

トシさんったら! いつも気を使ってくれる。

『はい! 大丈夫です。 おやすみなさい』

『おやすみ…』

私はシャワーを浴びて子供たちの横で休んだ。
ダンナは一人、書斎で寝ている。

横になると、今日一日のことが出される。
初めてやつたソフトボールのこと…。
そして、イチローさん…。

第69話 摺れる気持ち

「イチローちゃんは“みいじ”のことを気に入つたみたいだよ」

隣町の居酒屋。

彼が言った。

あの時のことを感じていいのかしら…。

「心配しないで下せ。 私にはトシさんだけですかから

「いや…。 そういうつもりじゃ…」

そう！ 私には彼しかいない。

自分に言い聞かせる。

ただ、そうないと自分でも不安になる。

ずっと彼を思い続けていた。

やっと願いが叶った。

一時の気の迷いで、この幸せを失いたくはない。
でも、なんだか怖い…。

第70話 何だか悲しい

4月。

娘が入学した。

これで正式にソフトボール部員だわ。

正式部員としての最初の練習田。

私は少し不機嫌になつた。

私の他に女性の新入部員が3人来ていた。

彼が親切に彼女たちに声をかけてあげている。

彼の立場では仕方のないこと。

でも、どうしてかしら…。

何だか悲しい。

「なつちゃん、キャッチボールしようか

声を掛けてくれたのはユウ君だった。

練習後、ユウ君に聞かれた。

「なつちゃんって川村さんと付き合つてるんですか」

第71話 よろしくね

「ちょっと嬉しいかも」

3人の女性新入部員を見て茂が言つた。

「ただけど、男が来ないのは問題だぞ」

中学は3年間。

あつという間だ。

下の学年に人がいないと部が成り立たない。

僕は新入部員に一通りのことを説明した。

ちょっと彼女が気になつてグランドの方を見た。
彼女はユウジとキャッチボールをしていた。

練習後、新入部員の一人、篠塚さんが声をかけてきた。

「よろしくね。私もユーカリなの」
ユーカリは陽子のバレーチーム。

第72話 何だかおかしい

「付き合ってるんですか?」

「気のせいいか、ユウ君の田がいつもと違つ氣がする。
なんて答えようか…。

彼とのことが知られるのはまずい…。

「そんなわけないじゃない

私はそう答えた。

すると、ユウ君は満足げに帰つて行つた。

その後、よくユウ君と顔を合わせる。

平日の毎晩。

「最近よく会つね」
「そうですね。なつちゃんちつてこの辺なんですか?」
「このマンションよ」
「そうですか。」

こんな時間にいるなんて、何だかおかしいわ…。

第73話 視線の先には…

彼女がソフト部に入つてから会つ機会は増えた。
彼女の顔が見られるのは嬉しい。
だけど…。

『たまには一人で会いたい』

そうメールした。

返事はない。

どうしたんだろ…。

次の練習日。

「どうした？ 最近忙しい？」

「そんなことは…」

そう答えた彼女の視線が定まっていない。
その視線の先にはイチローがいる。

「それならいいけど…」

練習が始まった。

女性3人はセカンドに入った。

すると、彼女はイチローになにやら声をかけている…。

第74話 気になる視線

いつも外野にいるイチローさんが今日はファーストにいた。
「一塁手つて難しいんですか？」

セカンドが嫌なわけではないけれど、やるからには試合にも出たい。
それなら、競争相手のいないポジションがいい。
私はそう思った。

「やつてみる？」
「はい！ やりたいです」

私がファーストに入った。
イチローさんがそばで色々教えてくれる。
三塁からの送球が来る。
ふと視線に入つて来たのはレフトのコウ君。
何だか私を睨みつけているみたい。

第75話 やっぱり彼女はセンスがいい！

彼女が一塁に入った。

「なるほど、いい選択だ」

このチームには固定した一塁手がない。

イチローが教えるなら彼女でもモノになるかも知れない。

そこじゃないけれど、キャッチングはしっかりできている。
普段は悪送球の多いヒロが彼女にはいい球を送球する。

「川村さん、やっぱり彼女センスいいね
休憩時間にイチローが言つ。

「これはめつけもんだな」

二人で話していると、彼女がチラッといつちを見た。
そして、雄一と談笑している。

第76話 悪夢の予感

さつきのユウ君の視線が気になる。
何だか私に対して怒っているみたい。

休憩に入ったのでユウ君に声をかけた。

「いや、一生懸命見てただけです」
そう言ってユウ君は笑った。

私は彼の方を見た。

イチローさんと話している。

目が合つた。

彼が微笑む。

私は頷いてまたユウ君に話しかけた。
すると、彼が私を呼んだ。

「じゃあ、行くね」

そう言った途端、一瞬、ユウ君の目の色が変わったように見えた。

私は得体のしれない恐怖心に襲われた。

第77話 歓迎会

『新入部員の歓迎会やろうか?』
茂からのメール。

会場はいつものカラオケ屋。

新入部員は女性4名。

時間になつたので茂が挨拶をして歓迎会が始まった。
彼女だけまだ来ていない。

僕と滋の周りに3人の女性が集まつた。

「ちょっと、そこさるいよ」

雄二が茶化す。

「特に川村さん、なつちゃんが来たら怒るよ」

「へー、川村さんってそうなんだ」

小山さんがつぶやく。

小山さんは陽子と同じバレーのチーム。

「何が?」

僕はちょっと焦つた。

第7・8話 興味津々

「雄一、変な」と言つた
僕は雄一を怒鳴った。

「冗談ですよ。そんなムキになんないで下さいよ」
雄一は笑いながらビールグラスを手に取る。

小山さんの目が、もう興味津々でたまらないといった感じだ。

ちょうどその時彼女が遅れてやってきた。

彼女はすぐに僕の方を見た。

僕も一瞬だけ彼女の方を見た。

彼女は空いている席を探しながら奥へ歩いていく。

小山さんが交互に僕たちを見て微笑んだ。
「陽子ちゃんには言わないから大丈夫よ」

第79話 疑惑

こんな時に限つて遅れるなんて。

彼の周りには既に他の女性部員が座っていた。
奥でユウ君が手招きしている。

仕方なくユウ君の前に座ることにした。

「川村さんはモテますね」

ユウ君が言った。

「そうだね」

私はそう言つて、もう一度彼の方を見た。

「気になるんですか？」

ユウ君がビール差しだした。

「そんなことないわ」

私は否定しながらグラスを持った。

ユウ君は私たちのことを見つけていた。

私はそう確信した。

なんとかしなくちゃ……。

『マズイわ！ ノウ君が疑つている』

私はトイレに行くふりをして彼にメールした。
すぐに返事がきた。

『ひとつも小山さんがヤバイよ』

えつ？ 小山さん？

確かに小山さんはマズイ。

陽子さんと同じチームだもの。

トイレを出ると私は引き攣つた。
小山さんが私のいた席にいる。
私に気がつくと、隣に座るよう言つた。

「川村さんって、優しくみなね」

と、小山さん。

いきなりきた。

「そうですね」

そう答えるのが精いっぱい。

心臓が剥けそう…。

第81話 針のむじり

「好きなの?
「はい」

「あー、どうしよう…。

小山さんに聞かれて、思わず“はい”と答えてしまった。

「ここによ。でも、彼って隠れファンが多いから競争率高いわよ」
「…」

私は何をどう答えればいいのか分からなかつた。

「あー、心配ないわよ。陽子ちゃんはオープンだから」

「…」

「モテるダンナが自慢なのよ」

「…」

「でも、程々にネ。さあ、歌でも歌いましょう」
そう言つと小山さんはカラオケをリクエストした。

早く帰りたい…。

第82話 僕が上手くやるから

カラオケが始まった。

中森明菜の『十戒』。

歌っているのは小山さん。

「いいっすねえ」

雄二がノリノリで手拍子する。

そして自分の曲をリクエスト。

会場は次第にカラオケモードに突入。
みんなが立ち上がって熱唱している。

私はなかなかノリ切れない。

彼は盛り上がりしているみたい。

彼のグラスが空になつていて。

私は彼の席に行つた。

私に気が付くと彼が隣に座つてくれた。

「僕が上手くやるから」

そう言つて彼は私の頭を撫でてくれた。

第83話 意味ありげな笑み

水割りを作っている彼女の表情が暗い。

「みいこも歌つて」

僕はそつと彼女に耳打ちした。

彼女は頷いて曲を入れる。

J-WALK『何も言えなくて…夏』。

名曲だ。

彼女が歌い始めると、みんな聞き惚れる。
歌い終わった彼女にみんながハイタッチ。
彼女も少し気が楽になつたようだ。

僕は小山さんの隣へ行き、念を押した。

「そんなんじやないから」

「分かつてるって！」

小山さんはそう言ってウインクした。
そして、意味ありげな笑み…。

第84話 彼の周りには…

「なつちゃん歌うまいよね」

そう言って向かいの席に来たのはイチローさん。

「そう！ 今度お祭りのカラオケ大会に出てよ」

口を挟んだのは幽霊部員の佐竹さん。

彼は仕事の都合でソフトには来ないけど、飲み会には必ず顔を出す。

「それ、いいね」

議員の信ちゃんもノッて来た。

トシさんが声をかけると、色んな人がやつて来る。

「嫌です！ そんなの」

お祭りのカラオケ大会だなんて…。

ふと彼の方を見る。

彼の周りにはまた3人の女性が…。

第85話 ふと浮かんだのは…

小山さんには彼が上手く話をしたみたい。
でも、ユウ君はちょっと怖い。

歓迎会がお開きになると、彼からの合図。

『一緒に帰る』

でも、ユウ君が一緒にいるのが気になる。
私は違う道から一人で帰ることにした。
彼は事情が分かつたようで、ユウ君を連れて歩きだした。

二人と別れると、私は家まで走った。

歓迎会の間、ずっとユウ君に見られているような気がした。

彼に相談しようか…。

そう思つた時、ふとイチローさんの顔が浮かんだ。

第86話 見張られている…

家に居ても落ち着かない。
誰かに見られているようだ…。

「お母さん、これからバレー・ボールだけど、絶対に窓を開けちゃダメよ」
子供たちに言い聞かす。

バレーが終わって戻つてくると、マンションの近くに人影が見えた。

ユウ君だ！

私は彼から見えないように、外部階段から部屋に戻つた。
そつと窓から外を見るとユウ君が辺りを窺つている。

ユウ君は私を見張つているんだわ。

そんなことが何度も続くようになった。
何とかしなくちゃ…。

第87話 相談であるのむ

『今日も暑いね。夕方ちょっとでもいいへ。』

久しぶりにトシさんから誘われた。

でも、ユウ君が見張つているからトシさんは会えない。

私はイチローさんに電話してみた。

イチローさんは快く相談に乗ってくれると言った。

数日後、イチローさんと待ち合わせた。

マンションの周りにユウ君の姿はない。

指定された店に着くと既にイチローさんは来ていた。

「やあ！」

「すみません」

「何があったの？」

私はユウ君のことをイチローさんに話した。

第88話 そんな「冗談」で済む場合はつかない

「本当に？」

イチローさんは驚いている。

「はい。 私、怖くて……」

イチローさんは暫く老えて口を開いた。
「警察に通報するべきだ」

本当は私もそうしたい。

でも、コウ類があることなどと蝶つてしまつたらアレシさんには迷惑
がかかるかもしれない。

そんなことになつたから……。

それに、子供たちが周りからなんて言われるか……。

「川村さんは話したの？」

「え？ 川村さんと私は別に……」

「今はそんなこと気にしてる場合じゃないでしょ、うへ」

第89話 自分から話してみます

「あいつ、川村さんのことだけはよく聞くから」イチローさんは警察に言えないなら、自分ヒトシさんとでコウ君に話をすると言うのだ。

どうしよう…。

コウ君だって家庭があるし、根っからの悪人だとは思えない。

「私、一度、コウ君と話してみます」

その後、ソフトの話などをしながら暫く一人で飲んだ。

イチローさんは心配だから近くまで送ると言つてくれた。

私は誰かに見られるのが嫌だったので川沿いの遊歩道からならと応じた。

第90話 私、すぐ酔つて

精神的に参つていいたせいか、大して飲んでいないのにすぐ酔つている。

気分が悪くなり途中でベンチに座つて休んだ。
イチローさんは心配そうに見守ってくれている。

「もう大丈夫です」

立ち上がろうとした瞬間、意識が飛んでよろけてしまった。
思わずイチローさんにしがみついた。
イチローさんはとっさに受け止めてくれた。
私はすぐに体を離した。

「「」みんなさー」

その後は少し距離を置いて歩いた。
そして、マンションの前で別れた。

第91話 彼女の小さい時は…

雄一主催のバーべキューにソフト部のメンバーが招待された。僕も彼女も参加した。

彼女ともう一人の女性メンバー結城さんは子供も連れて来た。

「下の子?」

「そうです」

「そつくりだね。

お母さん似かな?」

「はい」

彼女も小さい時はこんな感じだったのだろう。

バーベキューが終わってカラオケに流れた。

雄一とヒロと僕の三人。

彼女は子供と一緒にだったのでそのまま帰った。

暫くしてイチローからメールが来た。

『話があるんだけど…』

第92話 彼女には気をつけた方がいい

イチローはバー「ベキュー」には来ていなかつた。メールの後すぐに電話が鳴つた。

「今、抜けられそう?」

「大丈夫だけど」

「誰にも言わないつて約束できる?」

「もちろん!」

僕は別の店でイチローと会つた。

「彼のことだけど...」

イチローが口を開く。

そして、続ける。

「彼女には気を付けた方がいいよ」

「どういうこと?」

とりあえず、イチローの話を聞こう。

「彼女は自分の気を引くためにウソをつく

「何があつたのか?」

「実は...」

第93話 彼女の価値

イチローは彼女から相談を受けたことを話した。

「どう思つ? 僕は嘘だと思つけど」

イチローは断言する。

それからイチローは彼女が自分に気があるよつた素ぶりをしていると話した。

「川村さん、あの子に惚れてるでしょ?」

「お前、何か勘違いしてるよ」

僕はすぐに否定した。

イチローは更にこう言った。

「あの子に深入りしちゃダメだよ。 彼女にそこまでの価値はない

よ」

彼女のことほお前には分からぬ……。
僕は心の中でうそを囁いた。

第94話 誘導訊問

彼女の良さは僕が一番知っている。

きっとイチローは僕達のことを妬んでいるに違いない。
しかし、雄一がストーカーだとは信じ難い。

そんな時、雄一から電話があつた。

「川村さん、一杯やりましょう」

「いいよ」

ちょっと、誘導訊問でもしてみるか…。

僕は行きつけのパブに雄一を誘つた。

「なつちゃんつていいつすよね」

「雄一は彼女の話ばかりする。」

僕は適当に相槌を打つ。

「川村さん、付き合ひてるわけじゃないですね？」

「来たな…。」

第95話 後悔

やつぱりアシタねんに話をした方がいいかしら…。

コウ君のことを相談したけど、イチローさんに相談したこと。

私はイチローさんにコウ君のことを相談したのを後悔していた。結局、結論は出なかつたし、彼が私のことをどう思つたか心配になつてきた。

少なくとも、あの日の事は内緒にしておいて貰つた方がいい。

私はイチローさんにメールをした。

『この間の事は誰にも言わないで下さるこね』

しかし、イチローさんからの返事はなかつた…。

第96話 僕の女に手を出すなー

「なつちちゃんは付き合ってないと書きました
雄一は完全に彼女を女として見ていく。

「ねえ川村さん、俺ヤツちやつてもいいっすか
雄一の言葉にさすがの僕も眼の色を変えた。

「冗談はよせ
「俺は本気ですよ
真顔で答える雄一。

「無理だよ
チーム内での恋愛は禁止。
しかし、雄一は聞かない。
「川村さんには関係ないじゃないですか

僕は立ち上がり雄一の胸ぐらをつかんだ。
「だったら言ひ。あの子は俺の女だから手を出すなー。」

第97話 誤解

その後、イチローさんから音沙汰がない。
私は思い切って電話をかけてみた。

「もしもし」

イチローさんの声。

「浅井です」

「ああ、どうも」

「Iの間のJとでも話したいので、もう一度会つてもらひますか？」

「Jめん、忙しんで」

「少しでいいんです」

「…」

イチローさんは暫く黙っていたけれど、唐突にこう言つた。

「旦那がいるんだから他の男を誘惑するな。俺はそういうの許せないから」

そして電話を一方的に切つた。

誤解だわ…。

第98話 彼女の話は嘘じゃない

僕は雄一から手を離し、ゆっくりと席に着いた。

「やっぱりそうなんだ」「

雄一は僕を睨みつけた。

「川村さん、知っています?」

「何をだ?」「

「あいつ、イチローさんとも付き合つてますよ

「それがどうした?」「

「俺、全部知ってるんですよ

「何が言いたい?」「

「俺、あいつの事、見張つてますから
一瞬“しまった”という顔をする雄一。」

それは明らかにストーカー行為を認める発言だった。
つまり、それは彼女の話が本当だったということ。

第99話 彼は私の事を分かつてくれている

そもそも、最初に言い寄つてきたのはイチローさんよ。

トシさんからメールが来た時に断ればよかつた。.

『イチローが相談あるからアドレス教えてだつて』

『イチローさんならいいですよ』

相談は部員同士の喧嘩を収めるのに協力して欲しいといつことだつた。
それから何度も二人で飲みに行つた。

私は酔うと甘える癖がある。

イチローさんにもそんな素ぶりをしたかもしねれない。
それだけのこと。

トシさんはそんな私を分かつてくれている。

第100話 私は彼だけでいい

トシさんからメール。

ユウ君がストーカーをしていることを教えてくれる内容。

彼の方からきつかけを作ってくれた。

もう、全て話すしかない。

私は彼に会つてくれるようにお願いした。

平日の昼間なのに、彼はすぐに来てくれると言つた。

待ち合わせ場所に着くと、彼は既に来ていて一人だけで話ができる場所を手配してくれていた。

それだけ私の事を考えてくれている。

私はそのことが嬉しくてたまらなかつた。

私は…。

私は彼だけでいい。

第101話 真の事なら何でも平氣

彼女は子供が帰つてくるまでは帰宅しなければならない。
僕は率直に切り出した。

「雄二の事は気付いてたんだね?」

「はい」

彼女は俯いたまま返事をした。

「どうして話してくれなかつたんだ?」「迷惑掛けたくないで……」

「みいこのじとなら何でも平氣だよ」「でも……」

「僕がヤツと話を付けるよ」

「それは少し待つて下さ……」

「じゃあ、どうすの?」

「……」

彼女には何か考えがあるようだ。

「私……」

彼女は意を決したように口を開いた。

第102話 決意

「私、最終的には法的手段を取らうと思します」
そう切り出した彼女の言葉には強い意志が込められていた。
僕もそうするべきだと思っていた。

「そのためには、私自身がきちんとじていいないと……」

彼女の言いたいことは分かった。
僕とのことが公になると裁判では不利になる。

「トシちゃん、ユウ君に“俺の女”だって言つたでしょ？」

ついこの間の事がもう彼女の耳に入っている。

「ユウ君にそのことも責められたわ。 それから……」

驚いた。

第103話 なぜなら君が可愛かったから

「それからイチローさんにもこのことを相談したの」
彼女は申し訳なさそうな表情で僕を見た。

「イチローは何だつて？」

「警察に訴つべきだつて」

「やうだらう。他に誰かに訴つた？」

「ううん、一人だけ」

「イチローにも言われたんだね？ 僕達の事」「はい。それと、私がイチローさんにも色田を使つてゐつて……」

「雄一もそう言つてた」

「私はただ……」

「分かつてゐるよ。でも、それはみいこも悪い」

「えつ？」

「みいこが可愛すぎるから」

第104話 念には念を

「そんな…」

「みんなみいこが好きだから、妬んでるんだ」
彼女は恥ずかしそうな顔で僕を見る。

「僕が雄一ともう一度話してみるよ」

「はー」

そろそろ彼女を帰してあげないと子供達が帰つてくる時間だ。

「話が付いたら報告するから」

「お願いします」

「そろそろ帰らないと」

「はい。今日はありがとうございました」

僕は彼女を先に一人で店から出した。

それからしばらく時間をつぶした。

平日の昼間だからありえないだろうが念のために。

第105話 根回し

僕は早速雄一に電話した。

「川村さん、誤解です」

雄一は一連の行動を否定した。
酔った勢いで言ったことだと。

それにしては、話の内容がリアルすぎる。

「信用できないな。 しばらく様子を見させてもらひからな」

僕はそう言って電話を切った。

一方で僕は彼女とのことを“何もない”とみんなに思わせるために根回しを始めた。

『なつちゃんは川村さんの彼女』だといつメンバーの思い込みを払拭するためだ。

彼女が中傷されないように…。

第106話 胸騒ぎ

『その後どう?』

僕はその後、雄一に付きまとわれていなか彼女に確認してみた。

『何もないです』

彼女はそう返信してきた。

『でも、気を付けていてね。何かあつたらすぐに連絡をして』
『はい。』

数日後、僕は次の試合の連絡をした。

『優秀選手に選ばれると、僕とお揃いのTシャツが賞品だよ。他の子に取られないよう頑張ってね』

『はい! 頑張ります。楽しみです』

試合当日。

彼女が来ていない。
雄一も来ていない。
胸騒ぎがする……。

第107話 意味ありげな言葉

彼女が来ていません。

雄一まで。

まさかとは思うけれど、彼女とは電話も通じない。

「どうかしたの？」

声を掛けて来たのはイチロー。

「なつちゃんは連絡が取れないんだ」

「彼女は来ないと想いますよ」

イチローは意味ありげに言つた。

「何か知っているのか？ もしかして雄一と…」

「それは分かりませんけど…」

その後、雄一は遅れてやつて來た。

しかし、彼女とは音信不通のまま。

その時、僕の携帯が鳴つた。

「もしもし、浅井です…」

第108話 むひイヤー

試合前日。

イチローさんから呼び出された。
トシちゃんからも誘われていたけれど、イチローちゃんは僕のところに
た。

指定された店へ行くと、橋浦さんもいた。
彼とはフトに入る前から親交があつた。

席に着くなりイチローさんが言った。

「あなた、いい加減にしなむことよ
トシさんとのことらしい。」

橋浦さんが続ける。

「お前、いつからそんなヤツになつたんだ？」

ピンときた。

イチローさんは橋浦さんに全部喋つているんだ……。

もうイヤだ……。

第109話 私がバカだつたわ

「あなたのおかげで川村さんがおかしくなつてゐる
確かに最近、変だよな」

二人とも私を責めるように話をする。

私に言わせれば、一人の方がおかしいわよ…。
だけど、そんなことは言えない。

イチローさんは私がみんなにウソをついていると責める。
いくつか質問をして答えさせ“ウソ”だと言つ。
でも、それはあなたが言つたからでしょう。
それなのにこの人は全部自分から話しちゃうんだね。

信じられない。

私がバカだつたわ。

第110話 はらわたが煮えくりかえる

この人たちと関わるのはもうイヤ！
特にイチローさんは許せない。

最初にイチローさんが私に言つてきたのは橋浦さんと雄ちゃんの喧嘩の事だつたわ。

その時は“いい人”だと思つたのに…。
ソフトも優しく教えてくれたのに…。

橋浦さんも、こんなこと言う人じゃないと思つていた。
それなのに…。

「あなたは明日の試合に来るべきじゃない」
「やうだよ。ソフトも辞めろよ」

一人にそつ言われて、私ははらわたが煮えくりかえる思いだつた。

第1-1-1話 やっぱり会いたいよ

昨夜は一睡もできなかつた。

あんな風に言われて試合に行かないのは悔しい。
でも、の人たちの顔は見たくない。

朝から携帯が鳴りつ放し。

トシちゃんからは分かっている。

「めんなさい…。

本当に「めんなさい」。

ベッドの上で布団をかぶつて耳をふせこだ。

「ママ、 試合悪いの？」

子供たちが心配して声を掛けれる。

「ママ、 今日は試合でしょ？？」

「大丈夫」

私は布団から抜け出した。

会いたい…。

やつぱり、トシちゃんと会いたいよ…。

第1-1-2話 彼の声はいつもやれっこ

私はベッドから抜け出ると時計を見た。
もひ、お匂近い。

でも、まだ間に合ひ。

コートフォームに着替えて家を出る。

「ママ、頑張ってね」

「うさー！ 頑張るよ」

自転車に飛び乗って携帯を手にする。

「浅井です。 今から向かいます」

トシちゃんはややしき応えてくれた。
私はペダルを思いつきり踏んだ。

試合会場に着くと、真っ先にトシちゃんを探した。
すぐ見つかった。

ちよつと氣まずいので電話を掛けた。

「早くおいで」

彼の声はいつも優しい。

第1-1-3話 来てくれた！ それだけでいい

「早くおいで」

グランドのフェンス越しに彼女の姿を見つけた。

彼女は携帯をしまつと、ゆっくりとこちらに歩いて来る。

「じめんなさい」

彼女が申し訳なさそうに言へ。
でも、いつもの顔をしている。

大丈夫だろう。

「遅刻した罰だ。 今日は見学な

「はい」

来てくれた。

それだけでいい。

何があつたのかは聞かないことにした。

試合は1勝2敗。

優秀選手の賞品は次の試合に持ち越しすることになった。

「さあ、打ち上げに行こう

「はい」

第114話 びっくりしたよ

「乾杯！」

茂がグラスを持ち上げた。

「乾杯」

そして、みんなでグラスを合わせた。

もう、いつもの彼女だ。

打ち上げの会場にはイチローとハシ（橋浦）が来ていなかった。
それで、僕は何となく分かった。

「今日は先に帰ります」

もう一人の女性部員、白石さんが帰る。

「それじゃあ、私も……」

僕は頷いた。

彼女が帰った後、イチローからメールが来た。
僕はイチローのいる店に移動した。

「びっくりしたよ

イチローが開口一番そう言つた。

第1-15話 これじゃあ、らひが明かない

「彼女、よく来たなあ」と、イチロー。

「どうこつ意味だ?」

僕はイチローを問う詰める。

「昨日、彼女を呼び出して話したんだ」

「何を?」

「あまりにも嘘ばかりつかう」

「彼女にだって家庭があるし、身を守るためにつべ嘘だつてあるだろ?」

「身を守る? そんな感じの嘘じゃないよ」

「じゃあ、何だって言つただ?」

「男をバカにしている」

「そんなことはない」

「川村さんは彼女に入れ込み過ぎですよ」

「れじやあ、らちが明かない。」

第1-16話　お前に言われたくはない

「これじゃあ、らちが明かない。

僕は話を戻した。

「ヒカルで、今日はどうして彼女が来ないと言つたんだ？」

イチローはグラスのビールを飲み干す。

「みんなが迷惑しているから来るべきじゃないと言つたんです」

「それで？」

「彼女は怒つて帰っちゃいましたけどね」

「当たり前だな」

そして最後にイチローが一言。

「川村さん、家庭をこわさないで下さいね」

バツイチのお前に言われたくない。

僕はそう思つたけど、口には出せなかつた。

第117話　「のままじや彼女が可哀想

イチローの話はひどいものだった。
ついこの間まではなつちゃん、なつちゃんって夢中だったのに。
女の子相手にそこまで言つとは…。

イチローの言つことは分からぬいでもない。
ただ、もう少し、彼女の身になつて考えられないものか…。
まあ、人にはそれぞれの考え方がある。
それをとやかく言つても仕方ないか。
しかし、このままじや彼女が可哀想だ。

翌日、僕は彼女にメールした。
『イチローから全部聞いたよ』
すぐに彼女から返信…。

第1-18話　いつのひで、いつも女が悪く言われる

彼女からの返信メール。

『電話してもいいですか？』

すぐに僕の方から彼女に電話した。

「ちょっと会える？」

「はい」

彼女が指定した隣町の店で待ち合わせた。僕が店に着くと彼女は既に来ていた。

「何を聞きましたか？」

不安そうな顔で彼女が聞いた。

僕はイチローから聞いたことを細かく話した。

「こひいつのひで、いつも女が悪く言われるのね」

彼女の目には涙がこぼれかけている。

「僕にも責任がある」

「僕と会わなければ、彼女は……。」

第119話 もつ、誰も信じられない

「私は普通にみんなとお酒飲んで、ソフトヤツティングだけなのよ。
うしてこうなつちゃうんだろ?」

涙が彼女の頬を滑り落ちていく。

「みいこは悪くない。全部僕のせいだ

僕が誘わなければ彼女がこんな思いをすることもなかつただろ?。
僕はそつと彼女の肩を抱いた。

「違います。私が女だから、みんなそういう目でしか見ないんで
す」

彼女は声を震わせながら言つた。

「もつ、誰も信じられない……」

そして、彼女の涙がテーブルに落ちた。

第120話 彼女は母親

「僕だけはみいこの味方だから」「ダメです。そんなことをしたら今度はトシさんが標的にされるから」

「いいさ。いつそ、一人で辞めるか」

「それは嫌です。このまま、あの人達に屈したくはないですから」

涙はまだ止まつていない。

「私が負けたら、子供達にまで悪い影響を与えるわ」
やつぱり彼女は母親だ。

母親は強い。

「みいこは強いな」

僕は心からそう思った。

「トシさん、今まで通りにして下さいね」

「分かったよ。可愛いみいこ」

第1-2-1話 やつぱり悔しい

彼女の話とイチローの話はいくつか食い違つといひがあった。

どちらが間違つているのかなんてどうでもいい。

彼女に対する僕の気持ちは変わらない。

店を出るときは彼女に笑顔が戻つていた。

僕達は店を出たところで別れた。

翌日、彼女から電話が入った。

「やつぱり悔しい」

考えれば考えるほど悔しくて、夜も眠れないと言つ。

1時間ほど話したら、彼女は落ち着いたようだ。

しかし、話が終わつて電話が切れると僕は急に不安になった。

第122話 変化

男の人って、サバサバしているのだと思つていた。
どうして放つといってくれないのかしら。
この町の人って、そうなのね。

地元意識が強いんだ。

『いじじや、プライベートはない』

茂さんが言つていたわね。

何だかくたびれる。

ここで暮らすのが面倒になつて來た。

ダメダメ！

私が弱気になつたら、子供たちが不安になる。
子供たちが独り立ちするまで頑張らなくちゃ。

トシさんとも少し距離を置いた方がいいかしら。
彼なら分かつてくれるわ。

第1-2-3話 言いたいことが言いたせない

彼に話してみよう。

彼は私の気持ちをきっと分かってくれる。

私がメールをすると、彼はすぐに電話をしてくれた。
だけど、どう話せばいいんだろう…。

彼の声を聞くと、つい甘えてしまう。

彼が私のことをとても心配してくれているのが分かるから。

愚痴や取りとめのない話で一時間も経ってしまった。
仕事中なのに彼はずつと付き合ってくれた。

結局、言いたいことが言いだせなかつた。

これじゃあ、かえつて彼を心配させるだけじゃない。

第124話 彼は心配しているだらうな…

大会の後は次の練習日まで1ヶ月ある。

その間、私はバレーの大会がいくつかあって忙しかった。
彼とはほとんど接触がなかつた。

と、言うより私が彼に連絡する暇がなかつた。

色々な連絡事項をメールするのは疲れる。

私はこういうことが苦手。

それをサラッとこなす彼はすごい。

改めてそう思った。

実は、彼からは色々メールが入っている。

だけど、全く返事をしていない。

日々の生活に追われて余裕がない。

彼は心配しているだらうな…。

第125話 ピンゴー

1時間も話ができたのは嬉しかった。でも、いつもと様子が違う気がした。

彼女は何か違うことを話したかったのではないだろうか…。気になつて何度かメールをしたけれど返信はない。

そんな時、テレビで映画のCMが流れていた。
彼女の子供たちが好きな俳優が主役だった。
僕はチケットを購入して彼女に渡そうと考えた。

『たまには子供達と一緒に気晴らしじておいで

今度はすぐに返事が来た。

『そのチケットは頂きたいです』

ビンゴー！

第126話　久しぶりの彼女

さて、どうやって渡そうか。

宅配で送るか…。

考えていると、彼女から連絡がきた。

「今から出でれますか？」

二駅先の居酒屋で会うことになった。

僕は約束の時間より30分早く着いた。

個室が空いていたので、その席を取つてもらつた。

時間より少し遅れて彼女が来た。

彼女の顔を見て表情が緩むのを感じた。

僕は気を引き締めた。

そして、彼女が席に着くと早速チケットを差し出した。

「ありがとうございます。子供たちも喜んでいます」

第127話 えつ？ 今から？

テレビのCMで流れている映画。

「これ見たいね」

そんな話をしている時に彼からメールが来た。
『映画のチケットを貰つたんだけど…』

娘は二人共、この映画で主役を務める男優の大ファンだ。

「ねえ、その映画のチケットを頂けるかもよ」

「本当？ いつ？」

「本当よ。一緒にソフトをやつている人が持つていて

「じゃあ、早く貰つて来て！」

「えつ？ 今から？」

「うん！」

私は彼に電話をした。

もう、家に帰つているかしら…。

第1-28話 彼とこのと落ち着く

「子供に話したの？」

彼はちゅうとうじゆうじゆうしているみたいだつた。

「ええ。トシさんの名前は出せなかつたけれど」

「そりやあやうだよね」

「はい、今はまだ微妙な時期ですから」

一人つきつで会つのは本当に久しぶり。
やつぱり、トシさんといふと落ち着く。

「なかなか連絡できなくて」「めんなさい」「いいや。色々大変なのはわかつてゐるから」

いつもこのときたに限つて、時間がたつのも早い。
そろそろ帰らないと、子供たちが待つてゐる。

第129話 いちばん見られたくない人に見られた

「そろそろ帰らないと…」

「そうだね」

「今日は子供たちがこれを待つてしているので

「楽しんでおいで」

「はい！」

私たちは店を出てすぐに別れた。

また、一緒にところを誰かに見られたら面倒だし…。

彼と別れると、すぐにメールが来た。

彼はこういうところがまめなのよね…。

私は携帯を手に取った。
えつ？

イチローさんから？

『見たよ！ 川村さんと一緒にいたでしょ』

携帯を持つ手が震えた。

いちばん見られたくない人に見られていた。

第130話 彼に相談しなきゃ

「うひょー…。

トシさんに相談しなきゃ。

でも、こんな話、歩きながら出来ない。

とうえず、今日はこのまま帰ろう。

明日、子供たちが学校に行つたあとで電話しよう。

翌日、彼の昼休み時間を見計らつて電話をした。

私が言う前に彼から。

「イチローに見られた。だるい？」

「はい。でも、どうして？」

「僕のところにもメールが来たよ」

「適当にこまかしておいたから、話を合わせてね…」

彼は既にイチローさんと話をしてくれたみたい。

第131話 天に誓つて！

イチローからメールが来たので、すぐに電話した。

「相変わらず仲良くなってるんだね」

開口一番、イチローが言った。

「まあね。でも、今のは偶然だよ」

「へえー。また俺はてつきり…」

「バカ言うな！お前が余計なことを言つから、彼女は最近メールもよこさないんだ」

「それならいいけど…この際、もひ、彼女とは付き合わない方がいいよ」

「またそれか？そもそも、僕達は最初からそんなんじゃなregor」

「そうなの？」

「天に誓つて！」

「彼女に何か言われたんでしょう?」「僕が彼女とは深い関係ではないと言つと、イチローはそう返してきた。

「僕にしてみれば、お前が彼女と出来てること思つていただけどな
「確かに、最初はね……でも、もうこことよ」
「嘘つかれたからか?」「それだけじゃないけど……」「まあ、いいけど、相手は女の子だ。この前はやつすげじゃないか
？」

「川村さんの事を思えばですよ」「お前の気持ちは分かつた。だから、この件まではまだじょり

第133話 彼の思いが伝わって来る

あんなことがあったから、今日の練習に行くのは気が重いわ。
イチローさんが来ていなければいいなあ…。

それでも私は練習へと出かけた。
そこに行けば、彼の顔が見られる。

「表情が暗いな」

すぐに彼が声を掛けてくれた。

イチローさんは私を無視している。

「久しぶりにどう?」

彼がキャッチボールに誘ってくれた。

彼は遠慮なしで早いボールを投げた。

受けた手がしびれる。

だけど、しつかり受け止めよう。

彼の思いが伝わって来るから。

第134話 満足そつな彼の顔

練習の後、いつものように食事に行つた。

彼と、茂さんと、橋浦さん。

イチローさんが来なかつたので、ホッとしている。

橋浦さんは、もう気にしていないみたい。

だけど、まだ気が許せない。

「ちょっと早いけど、忘年会の日程を決めよう」
彼が切り出した。

そして、12月初めの土曜日に決まった。

「今年はボウリング大会やるよ」

「いいね！」

ボウリングはちょっと得意。

楽しみが一つ増えた。

そんな私の表情を確認して、彼も満足そつ。

第135話 誕生日、覚えていてくれた

トシさんからソフトの連絡。

『今週、六中さんへ遠征して練習試合』

遠征。

どうやって行くのかしら?

『どうやって行くのですか?』

『学校に集まってチャリで行くよ』

えつ?

私、自転車がない。

翌日、トシさんからメール。

『みいこ、自転車なかつたね! 置つてあげる』

そんな。

悪いわ。

『もつすべ誕生日だよね。 ちょっと早にナビゲント

覚えていてくれたんだ!

うれしい。

でも、自転車なんて…。

『実は、もつべがひやつたんだ』

第136話 あなただと思って大事にします

『 もう置つねやつたんだ』

トシさんはいつもそう。
思いついたらすぐにやつてしまつ。
だから、変に疑われたりするの「」。

『 [モ配で直接、みいこのところに届くよ]』

でも、今度は嬉しい。

二日後、自転車が届いた。
オレンジ色の自転車。
格好いい！

私はすぐにトシさんに電話をした。

「 ありがとうございます」
「 気に入ってくれた？」
「 はい！ とっても」
「 大事にしてね」

はい。 トシさんだと思って大事にします。
そう、心の中でつぶやいた。

第137話 やつ言えば、あの時も…

あの時もそうだったわ。

ソフトの練習でバッティングの時。

私は女性だから、重いバットはどうして振り切れない。

他の女性は経験のある人ばかりだから上手く打てるけれど、私はバットに振り廻される感じ。

それを見ていたトシさんは、私用にバットを買ってくれた。

嬉しかった。

でも、それが大変な問題になっちゃった…。

「ほり、これあげる」

みんなが見ている前で手渡された。

「なんだ?」

みんなの視線が集まる。

えつ?

どうじょひ…。

第138話 言ってる意味が分からない

数日後、キャプテンに呼び出された。
その席には橋浦さんとイチローさんも。

「川村さんの態度があからさまだなあ」
橋浦さんが切り出す。

そして、続ける。

「お前たちどうなってるんだ?」

「どおつて?」

「付き合ってんのか?」

「そんなことはないです」

すると、キャプテンが口を開いた。

「川村さんは連絡どるな」
えつ?

「この件は会議を開いて議題にあげよつ
言つてる意味が分からぬ。」

「大袈裟だよ」

イチローさんが口を挟んだ。

第139話 論点がずれてる

イチローさんが続ける。

「プライベートなことなんだから関係ないでしょ」

「チームの和が乱れる」

橋浦さんが声を荒げる。

「私のバットは没収する」

と、キャプテン。

「あれは私物なんだから、そんなことする権利はないでしょ」

イチローさんが反論する。

「じゃあ、私物の持ち込みは禁止だ」
頑なにそこにこだわるキャプテン。

「論点がずれてる」

イチローさんは冷静。

「どうなるの?」

トシちゃん…。

「つそり渡してくれればよかつたのに。」

第140話 やっぱり彼が好き

その後は私困つたもの。

彼からメールが来て、返事ができなかつた。

彼は心配してくれたし、私が彼の事を嫌いになつたのだと思われていたし…。

結局、我慢できなくて電話をしてしまつたけれど。

今思えば、あの“連絡禁止命令”は何だつたのかしら。いつの間にか自然消滅してしまつた。

イチローさんとギクシャクし始めたのもあの頃だつたわ。

それもこれも過去の事。

彼は私を困らせるよりも少なくないけれど、やっぱり私は彼が好き。

第141話 オレンジ色の自転車

「トシさんが買つてくれたこと、他の人には言わないで下さい」

彼女から念を押されていた。

バットの時の事があるから当然だろ？

練習試合に向かう途中、彼女の自転車を眺めていた。

オレンジ色の自転車。

彼女に良く似合う。

「なつちゃん、自転車買つたの？」

メンバーたちが声を掛ける。

「はい、主人が買つてくれたんです」

笑顔で答える彼女。

主人か…。

ちょっと複雑だけど、仕方がない。

まあ、少しくらい旦那に花を持たせてやる？

第142話 久しぶりのメール

『離婚しちゃつた』

メールをくれたのは結婚する前から付き合っている睦美。久しぶりに飲もうと言つので週末に会つことにした。

睦美とは男と女の関係というより、友達と言つていい。もう、30年近い付き合いになる。

友達とは言え、セックスもした。

それは、愛し合ひと言つよりもスポーツ感覚のものだった。

僕が陽子と付き合い始めて結婚してもその関係は続いていた。陽子も彼女の事は知つている。

そんな彼女が会いたいと言つて來た。

第143話 20年という時間

待ち合わせ場所はたくさんの人でごった返していた。

会うのは20年振りか…。

それでも、彼女を見つける自信はあった。

ところが時間になつても彼女は現れない。

僕はたまりかねて電話をかけた。

すると、田の前の女性が手を振つた。

「分からなかつたわ」

「20年は大きいな」

近くの居酒屋に入った。

「益々いい女になつたな」

「ありがとう、トシもいい男になつたじゃない」

話をしているうちに20年の歳月はあつといつ間に消え去つた。

第144話 懐かしい想い出

「こりゃじつなると思つていた」

「どうして？」

「ケンはお前とは会わないと思つていたから」

「やつぱつり？」

「あの頃、惚れてるヤツいたよな？」

「妻子持ちだつたけどね」

「そうだ！ 思い出した」

「それで、トシにぶたれたわ。 田を覚ませつてね」

「そんなこともあつたな」

懐かしい話は時間を忘れさせた。

「陽子ちゃんは元気？」

「相変わらずや」

「トシはいい子見つけたよね」

「お前にその気がなれやつだつたからな」

「やつなの？」

第145話 空気が微妙にねじれた

「それって、私に氣があつたってこと?」
睦美は意外だといつ表情で僕を見た。

「まあな

少し氣恥ずかしかつたが、20年も前の事だ。
もう時効だと思って打ち明けた。

「ふーん…」

彼女は一瞬目をそらした。

空気が微妙にねじれたような感じがした。

「ねえ、美味しい日本酒が飲みたいわね
ボクも彼女も日本酒党。

「美味しい地酒を飲ませてくれるお店があるのよ

「いいねえ

「決まり!」

そう言つと、彼女は伝票を掴んで席を立つた。

第146話 誕生日の日に一緒にいたい

前の自転車が壊れる前は、近所の「ノンビーバー」へは歩いて出かけていた。

今は、どこへ行くにも自転車で出かける。

トシちゃんと一人で出かけてくる気分になれるから。

今はトシさんのとの事をみんながとやかく囁つから自重しているけれど、やっぱり一人だけで会いたいわ。

そう言えば、トシさんの誕生日ついでに…。

私は誕生日のプレゼントを早く貰っちゃったけど、誕生日は明日。

明日は一緒にいたいけれど、私からは説えない。

第147話 ベッドの中でふと思つた」と

そう言へば、明日はみいこの誕生日だなあ…。

ベッドの中でもふとそう思つた。

睦美はシャワーを浴びている。

浴室から出て来た睦美は何もつけていない。

20年前と変わらない。

とても子供を産んだ女性には見えない。

「どうする? 泊つて行く?」

睦美が聞く。

「いや、今日は帰る」

「やう、じゃあ、服を着るわ」

そう言って、睦美は身支度を整えた。

僕も、ベッドから出て服を着た。

「トシ、好きな人がいるでしょ?」
「えつー、どうして?」

第148話 あなたのいじり

「うう……。

睦美は更に続けた。

「陽子ちゃんにはバレない様にしなよ」
「どうして分かった?」
「分かるわよ。今日は私と田を合わせてないもの」
「そんなことはない……」
「そりなのー。他の人には分からなくても、私には分かるのよ」
そう言って睦美は僕の口をふさいだ。
黙つて聞けと言つ風に。

「彼女もきっと気が付くわよ。だから、今日の事はいじりを出たら
すぐに忘れなれど。そりこりといじりがあなたのいじりでもあ
るんだけどね……」

第149話 バースデーメール

帰りの電車の中で日付が変わった。

『誕生日おめでとう』

彼女にメールした。

すぐに返信。

『ありがとうございます。 ところでトシさんの誕生日はいつですか?』

『12月2日』

『もうすぐですね。 何か欲しい物はありますか?』

『欲しい物か?』

『みいこ』

その後は返信がなかつた。

さすがに、露骨だったか?。

翌日は土曜日。

仕事も休みで、久しぶりに朝ゆっくり起きた。
時間を確認するために携帯を見た。

メールの着信がある。

彼女からだ。

第150話 真に会えるなら百年でも待つ

『今日は子供たちと実家に行きます。子供達はさちに泊します。トシさんは何をしていますか?』

きっと、実家で誕生日のお祝いなんだろ?。最初はそう思つたけれど、すぐに気が付いた。子供たちを実家に預けることだ。僕はすぐに彼女にメールした。

『会いたい』

『遅くともいいですか?』

『みいこに会えるなら百年でも待つよ』

『出られそうになつたらメールします』

お互に同じくらいの時間で行ける場所を彼女に伝えた。

第151話 心の反応

両親と子供達。

昼食は5人で実家近くのファミレスに行つた。

両親は孫さえいれば私なんかどうでもいいみたい。

「（）はん食べたら映画見たい」

長女が提案した。

妹も賛成のようだ。

「よし、分かった」

父が言い、母も頷いた。

「奈津美は？」

「私はちょっと…」

「いいわよ。子供達は任せて、たまにはゆっくりしておいで」
私の気持を見透かしたように母が言つた。

「そうね…。学校の用事もあるから家に戻るわ。明日の夕方、
迎えに来るね」

第152話 準備万端

ゆっくり起きてリビングに行くと、陽子が出掛けの支度をしていた。

「今日はずっと居るの？」

「ずっと… ではないかな」

「ご飯の支度はお願い出来るかしら?..」

「大丈夫… かな」

「私、出掛けれるよ」

「うん」

そう言えば、今日は高校時代の友達と会つと言っていた。

子供達も出かけて居ないようだ。

僕は有り合わせのもので昼食を済ますと、カレーを作り始めた。

カレーなら、子供達だけでも勝手に食べられる。

これでいつでも出掛けられる。

第153話 神様も応援している

「こんなことなら、遅くなるなんて言わなければよかつた。

トシさんはもう出かけられるかしき。

そう思つてとこひに携帯電話が鳴つた。

メールだ。

トシさんだ。

『一つでもいいよ』

まあ！

私はすぐに電話をかけた。

「今、大丈夫ですか？」

私は両親が子供達を見てくれるので、既に自由になつたことを彼に伝えた。

『神様が僕達の事を応援してくれているんだ』

彼はそんな話をして、すぐに会おうと言つた。

もちろん、私は「はい」と即答した。

第154話 すぐでも飛んで行きたい

すぐでも飛んで行きたいけれど、シャワーを浴びて下着を交換した。

それから、子供たちにメモを残した。

僕はJRの最寄りの駅まで自転車を飛ばした。
せっかくシャワーを浴びたのに、もう汗びっしょりだ。

電車に乗って20分。

約束をしている駅に着いた。

待ち合わせ時間より30分早く着いた。

どこかで時間をつぶそうか……。

そんなことを考えていたら、いきなり後ろから抱きつかれた。

「早かつたね」

聞きなれた声。
可愛いみたい……。

第155話 いつもと同じ彼女の手の感触

僕は彼女の手をそつと振りほどいて向き合った。

「初めて。 38歳のみいこ」

少し照れくさそうな彼女の笑顔。
そして、遠慮気味に口を開いた。

「あのね… 見たい映画があるの

どうやら、子供たちが見に行つた映画は彼女も見たいものだつたら
しい。

「トシさんが早く来てくれたから、次の上映に間に合ひのよ

「よし！ わかった

僕はそういふと、彼女の手を取つた。

僕の手を握り返す彼女の手の感触は、いつも通りでとても柔らかい。

第156話　君が隣にいるだけでドキドキが止まらない

その映画は僕も見たいと思つていた。

だけど、彼女が隣にいるだけでドキドキだつた。

もちろん、上映中はずつと彼女の手を握つていた。

「面白かつたね！」

彼女に聞かれたけれど、僕は答えられない。

「良く分からない」

「面白くなかった？」

「そうじやないんだ。」

みいこが隣にいたからドキドキして映画ど

「うじやなかつた」

彼女の顔が見る見る赤くなつていぐ。

「うじやなかつた」

「今度は僕に付き合つてね」

「はい」

第157話 好きな人と過ごす誕生日

今日の彼はずいぶん緊張しているように見える。
この後はきっとホテルに誘われる。

誕生日に好きな人と過ごせるのは嬉しい。
彼もそう思っているはず…。

「とりあえず、『j飯食べに』」
「はい」

私たちは適当な居酒屋に入ることにした。
エレベーターの中では一人きり。

彼がキスをしたがっている。

私は彼の顔を見上げて目を閉じた。
彼の唇がそっと私を包んでくれる。

目的のフロアに着いた。

私は降りようとする彼の手を掴んで引きとめた。

第158話 早く一人だけになりたい

「お腹は減つてないわ」
僕の手を掴んだ彼女が言つ。

「早く一人だけになりたい」

彼女の言いたいことはすぐに分かつた。
それはきっと僕がそう考えていたからだ。
そんな思いを彼女は感じ取つている。

僕はエレベーターに戻ると、“1”のボタンを押した。
そして、彼女を抱き寄せ、唇を合わせた。

僕はそのビルを出るとホテル街へ向かつた。
彼女は僕の少し後ろをついて来る。

そして、ホテル街の中ほどで立ち止つた。
彼女はそつと頷いた。

第159話 僕達はそのまま一つになつた

部屋に入るとすぐに抱き合つて唇を重ねた。そして、抱き合つたまま彼女の服を脱がせた。

彼女も僕のズボンのベルトを外す。

僕の唇は首筋から胸へ。

彼女の白い肌を次第に下の方へすべらせる。

小刻みに体を震わせながら甘い声を漏らす彼女。

僕達はそのまま一つになつた。

ベッドに移動すると、より一層熱く燃えた。

僕が彼女の中で終わりを迎えると、背中にまわされた彼女の腕に力が入る。

そして、僕達はそのままの状態で余韻に浸つた。

第160話 もう少しのままでいたら…

7歳年上の彼。
だけど、ベッドの中ではまるで子供みたい。
そんな彼が愛しい…。

彼は時間がたつのも忘れてくれるくらい何度も愛してくれた。
疲れて眠りに落ちた時はもう明け方近かつた。

少しの時間だけ、けれども深い眠りについた後に彼の口付けで目が
覚めた。
チェックアウトギリギリまで、私たちはそこで過いした。

それまで、彼は何度もキスをしたし、優しく胸を触つたりもした。
ずっとこのままでいられたらどんなに幸せか…。

第161話 私が夢を見続けるために

いつものように、ホテルを出たらそこで別れることにした。

昨日と同じ服で子供たちを迎えて行くわけにはいかない。

一旦、家に帰らなければならない。

でも、彼と一緒に帰るわけにはいかない。

今日は私が少し時間をつぶしてから帰ることにした。

私は駅へ向かう彼を見送り、近くの喫茶店に入った。

これから少しずつ、現実に戻るために気持ちを切り替えていかなければならぬ。

それが出来なければ夢を見続けることは叶わないのだから。

第162話 僕が夢を見続けるために

彼女と別れてから、僕は一度も振り返らずにホームへの階段を上った。

待ち合わせして彼女を待つ時間…。

小走りに駆けよる彼女を見つけた瞬間…。

柔らかな彼女の手の感触…。

とろけるような彼女の唇…。

抱き心地のいい彼女の白い肌…。

思い出すだけでドキドキしてくる。

振り返ればそこには彼女がいるはず。

だけど、ここで振り返れば夢から覚めることが出来なくなる。

いつまでも夢のままではいられない。

夢を見続けていくためにも…。

第163話 僕の現実

家に帰ると誰もいない。

そこへ陽子からのメール。

『夕食の支度できる?』

僕が昨夜帰らなかつたことには一言も触れない。

陽子には、僕が“浮氣”をするという概念は全くない。

僕自身、みいことの事は“浮氣”とは思っていない。

“遊び”なのかと言えば、違う。

みいことは知り合つたのが遅かつただけ。

そして、彼女には家庭がある。

僕にとっては一人とも大切な女性。

『いいよ』

『やつた!』

既に、いつもの休日。
そして、これが現実。

第164話 私の現実

家に帰ると主人がいた。

「早かつたな」

私は何事もなかつたように答えた。

「バレーの打合せがあるの。 終わつたらまた子供達を迎えて行くの」

私はそのまま浴室に向かい、シャワーを浴びた。
シャワーを浴びながら、彼の唇の感触を思い出す。
彼の唇が触れたところを指でなぞつてみる。

着替えて主人に声を掛けた。

「夕食は実家で済ませるけれど、一緒に行く？」
「適当に済ますからゆっくりしてくれればいい」

もう、いつもの現実の世界だ。

第165話 えつ…ひつして?

私は茫然とその光景を眺めていた。

バレーの大会に出掛ける直前。

マンションの駐輪場。

自転車のタイヤがパンクしている。

トシさんが買つてくれた自転車。

パンクなんてものじゃない。

大きく切り込みが入れられてチューブまで出されている。

急きょ娘の自転車を借りて出掛けた。

試合が始まると私は試合に集中した。

「浅井ちゃん、今日は調子いいね」

陽子さんがご満悦。

スタンドにはトシさんもいる。

でも、自転車のことなんて言おつ……。

第166話 寂しいけれど仕方がない

試合は2回戦で優勝候補の学校に負けたけれど、いい試合だった。試合後、トシさんと陽子さんが楽しそうに話している。トシさんはそのまま会場を出て行った。

何だか、寂しいけれど仕方ないこと。
でも、自転車のことはホツとした。

「わあ、打ち上げ行くわよ
やつて私の肩を叩いたのは陽子さん。

「今日はパパに夕飯の支度を頼んだから、ひとつお付合つわよ
と皿邊げに言う陽子さん。

やつぱりトシさんはいの父さんなんだ……。

第167話 安心して…

打ち上げがお開きになると、一次会へ。
陽子さんもノリノリで加わった。

私はそこでみんなと別れた。

みんなを見送ると、携帯電話を取り出した。
今ならトシちゃんと陽子さんと一緒にしない。

『川村です』

トシちゃんの姫。

「浅井です…」

トシちゃんは今日の私をたくさん褒めてくれた。

『打ち上げ中…』

「もうお開きになりました」

『じゃあ、陽子も帰つて来るね』

「奥さんは一次会へ行きましたよ」

『ねつか、じゃあ安心だ』

やつ、安心して…。

第168話 つかの間のやうやう

楽しい…。

トシさんと話をするのはとても楽しい。

そう思った時、キャッチが入った。

一瞬、背筋が凍つた。

陽子さんからだ。

一旦、トシさんとはお別れだわ。

『今日はお疲れ。 ゆっくり休んでね』

それだけだった。

ホッとした。

再びトシさんに電話しようとした瞬間。
駐輪場に人影が見えた。

私の自転車が止めてある辺りだ。

私は隠れて様子を見た。

心臓が破裂しそうになつた。

ユウ君?

私の自転車に何かしている。

まさか、あのパンクも…。

第169話 犯人

怖くて出ていけなかつた。
そこへトシさんからメール。

『今日は疲れただらう? ゆっくりお休み』

トシさん、そりじゃないの…。
だけど、どうしよう…。

ユウ君がいなくなつて、自転車のそばに行つた。
ひどい!

朝は前輪だけだつたのに後輪まで。

あまりのショックで体中の力が抜けてしまつた。

翌朝、無意識のうちにトシさんにメールをしていた。
『自転車パンクさせられてしまいました。すぐに修理に出します
ね。ユウ君にやられました…』

第170話 また彼に心配をせてしまつた

トシちゃんからすぐに返信が来た。

『どういひこと? 話がしたいから電話しても大丈夫?』

ああ、またトシさんに余計な心配をさせてしまつた…。
私はどうしていいか分からず、返事が出来なかつた。

お昼休みに電話がかかつて來た。
でも、出られない。
すると、すぐにメール。

『また夕方電話するね』

トシちゃんはちやんと私の仕事のことを気遣つて連絡をしてくれている。

夕方になると私もだいぶ落ち着いてきた。
そして、私から彼に電話した。

第171話 心細げな彼女の声

仕事中に携帯が鳴つた。

“みいこ”

ディスプレイにそう表示されている。

僕はすぐに携帯を持って外に出た。

『浅井です…』

心細げな彼女の声。

僕はパンクの経緯を詳しく聞いた。

「まさか、あれからもずっとヤツに脅されたり、そういう類のメールや電話があつたんじゃないのか？」

僕が問い合わせても彼女は黙つたまま。

「あつたんだな！」

「はい…」

彼女は周りに心配を掛けたくないで、一人で抱え込んでいたに違いない。
なんてこった…。

第172話 勇気のこじだせ、やせながれ

こんな事態になつてゐるのであれば、これ以上雄一に情けを掛けるのは無理だ。

然るべき措置を講じた方がいい。

そのためには、この件を旦那に話して協力してもらわなければならない。

僕は彼女をそう説得した。

僕の話を聞いて彼女も危機感を強めたようだ。

「とても勇気のいることだけど、やらなきゃダメだよ」

僕は念を押した。

「はい

彼女はそう答えたけれど、その口調からは、まだ“決心”とまではいっていないことが伝わってきた。

第173話 私、可愛くなんかないの兀

本当にトシちゃんの言つ通りだと思ひ。
でも…。

主人に話したら外に出してもらえなくなる。

どうして、私ばかりこんな目に会うの?
他にも女性はいるのに。

「みいこが悪い! 可愛すぎるから~

以前、彼に言われた言葉が浮かんできた。
可愛くなんかない…。

そう思いながら鏡に映った自分の顔を見つめた。
可愛くなんかないわ。

「ただいま」

子供達が帰ってきた。

「ママ、泣いているの?」
長女が聞いた。

「えっ、どうして?」
「だって、涙」

第174話 そんな自分が嫌になる

大丈夫かな…。

僕は電話を切った後も気になつた。

彼女は僕とのことを心のどかかで後ろめたいと思つてゐるのかもしれない。

それは仕方がないことだ。

彼女には家庭があるのであるから。

それを言えば僕もそうなのだけれど。

やはり、男と女とではまわりの見方も違う。

それにしても参つた。

結局、僕は僕の都合でしか彼女に接していなかつたのかもしけない。

いい気なもんだ。

そんな自分が嫌になる。

彼女はどんなに辛い思いをしていたことか。

第175話 絶好の機会

それについても、あの野郎は許せないな。
何とかしなきゃ。

でも、彼女に危害が及ぶとまずい。

そんなことを考えていると、雄一からメールが入った。

『今晚、一杯どうですか?』

何を考えているんだ?

でも、ヤツの本性を確かめるには、いい機会かもしれない。

『いいよ』

そして、僕は行き付けの居酒屋を指定した。

約束の時間に店へ行くと雄一は既に来ていた。
既に、かなり酔っているようだ。

「ご機嫌だな」

「はい、臨時収入があつたので」

第176話 少しの間なう…

今日はいつもより早く主人が帰ってきた。

「すぐ出かけるから飯はいい」

「どこへ？」

「増田くんと飲む約束したんだ」

増田さんは主人の会社の後輩で同じマンションに住んでいる。

「そうだ！ 携帯の電池が切れてるんだ。お前のをひょっと貸しててくれ」

「ううう…。

下手に断つたら怪しまれる。

まずいメールや着信履歴は消してある。
少しの間なら大丈夫かな。

「どうだ。でも、私もバレーの連絡入るから早く返してね

「分かったよ」

第177話　お前が決めたならやつすればいい

「実は俺、離婚したんです」

一瞬、真顔になつた雄二が言った。

そして、続けた。

「だからソフトも辞めよつと思ひます」

僕は黙つたまま頷いた。

「それで？」

「えつ？」

雄二は僕が止めてくれると思っていたのか、以外だといつよくな顔をした。

「お前が決めたならそつすればいい」

僕はそう言つて雄二の反応を確かめた。

「分かりました」

雄二はそう言つと、一気にグラスの中身を飲み干し、ドスンと音を立ててグラスをテーブルに置いた。

第178話 もの場面が僕の頭の中をよぎった

「辞めるから関係ないんだけど、川村さんにだけは話しておきますね」

雄一は完全に目が座っている。

「橋浦さんなんですか……」

そこまで話して、雄一は口を開じた。

「ヤツを嫌つてるのは知ってるよ
僕は話を促すために口を挟んだ。

「アイツだけじゃないですよ」

「他にもいるのか?」

「俺、見たんですよ」

「何を?」

「一人がキスしているといふ」

「一人つて?」

「橋浦となつちやんですよ」

一瞬、その場面が僕の頭の中をよぎった。

第179話 そんなんのは本人の自由だ

僕はその映像を強引に振りはらつた。

そして雄一に言った。

「それがどうした？」

雄一は驚いた顔をしている。

こういう話をすれば僕が取り乱すとでも思っていたに違いない。

僕は続けた。

「そんなんの本人の自由だ。周りがとやかく言つことじゃない」

僕は平然と言つてのけた。

雄一は不満げな表情だ。

「そうですか？まあいいや」

雄一はお代わりした酒をまた一気に飲んだ。

「そうだ、カラオケ行きましょう

雄一は飲み直そうと誘ってきた。

第180話 めんなしくしてればいいんだが…

平日とこいつともありカラオケ店はすいていた。
一人の貸し切り状態だ。

「誰か呼びますか？」

そう言うと雄一は電話をかけ始めた。

「誰も来ないですな」

「いいじゃないか」

「みんな、俺のこと嫌いなんですかね」

雄一は不満そうだった。

僕は前の日も遅かったので11時過ぎに切り上げようと言つた。
雄一はまた誰かに電話している。

「もう遅いんだからいい加減にしどけ」
僕はそう念を押して店を出た。

「おとなしくしてればいいんだが…。

第181話 飲み友達！？

主人が帰ってきたのは深夜の1時頃だった。
私がお風呂から上がつたところだつた。

「ありがとう」

そう言つて主人は私の携帯を差し出した。
私が受け取ろうとすると、携帯を持った手を引っ込めた。

「ちょっと聞きたいんだけど……」

主人は携帯を開くと、着信履歴を表示した。
その画面を見て私は背筋がぞつとした。
ユウ君からの着信が十数件ある。

「こいつ、どうこう奴だ？」

私は一瞬、言葉に詰まつた。

「飲み友達よ」

咄嗟にそう答えた。

第182話 ましい…

「飲み友達？」

明らかに、主人の目に疑惑の色が浮かんでいる。

ましい…。

「こんな時間に、こんなに電話するなんて常識ないんじゃないかな？」

「きっと醉つてたのよ」

私が答えると、主人の顔に怒りの表情に変わった。

「おまえ、こんな奴と付き合つてるのか？」

私は言葉が出ない。

「やつと言えば、増田がお前が夜中に男と歩いてるのを見たと言つて

いたぞ」

「そんなことはないわ。きっと人違いよ」

トシさん、助けて！

私は心の中で呟いた。

第183話 ピンチ… それは逆にいいきっかけ

家に帰つてから、僕は雄一から聞いた話も含めて、彼女に報告のメールを入れた。

翌日、彼女から電話があつた。

僕は昨夜、彼女が携帯を田那に貸していたことを聞いて焦つた。

「じゃあ、僕のメールも見られたのか？」

「メールは開かれていなかつたから大丈夫…」

それを見て安心したのだけれど、今後、彼女に対してはより一層気を使ってあげなくてはならないと心の中で思つた。

でも、それは逆にいいきっかけになつたのではないか…。

第1-84話 罪悪感と恐怖心

彼の言つ通りかもしない。

これ以上、主人に対してもう一つアッピングされてくるかもしれない。

出来ることなら、丸くおさまってくれればいいと思つていたけれど、いつなつてしまつたらコウ君を切り捨てるしかない…。

切り捨てる…。

そう思つとつゝい罪悪感を抱いてしまう。それと同時に、いつか仕返しされるのではないかという恐怖心も増していく。

私だけならいいのだけれど…。

脳裏には子供達の顔が浮かぶ…。

第185話 そのためにしなければならない」と

私だけなら我慢すればいい。

雄一は由梨の顔を知っている。

今更ながら、バーベキューに連れて行ったことが悔やまれる。子供たちが何かされたら…。

それだけは阻止しなければならない。

週末、子供達を実家に預け、主人が帰つて来るのを待つた。

「子供達は?」

「実家に預けてきた」

「また出かけるのか?」

主人があからさまに表情を変えた。

あれ以来、主人は私が外に出るのを良く思っていない。

「話があるの…」

私は率直に切り出した。

第186話 告白

表情を硬くしたまま主人はソファーに腰を下ろした。

「別れ話でも切り出すのか」

皮肉っぽく主人が言ひ。

私は主人の向かい側に座り、数十枚の写真を並べた。
そこには、雄一から来たメールの内容が写されていた。
写真は俊哉のアドバイスで撮影しておいたものだ。

「どういふことだ？」の坂田雄一って…

「そう、あの日の電話の…」

それから、私はこれまで雄一にされてきたことを全て主人に話した。

「どうして早く言わなかつたんだ？」

第187話 意外な言葉

「ソフトの仲間は誰もこのこと知らないのか?」
「何人かには相談したわ」

「そしたら?」

「旦那に話して、法的に対処したほうがいいって…」

「もつともだ。お前はどうなんだ?」

「私もそうした方がいいと思う。だからあなたに話したの」

主人は暫く考えていた。

そして、こう言った。

「俺が話をしてみるよ」

「えつ?」

「一度、その坂田つて奴に会おつ」

私は主人に言われて、ユウ君にメールをした。
返事はすぐ来た。

『すぐに行くよ!』

第188話 ヤツの顔が蒼褪める

私は主人と二人で、近くのファミレスへ来た。
そこにユウ君を呼んだからだ。

主人は隣の席に私と背中併せで座つた。

間もなくユウ君がやつてきた。
そして私の向かいに座つた。

「珍しいね。

奈津美から誘うなんて。どうしたの？」

「主人が話があるって…」

「はいつ？ 誰が？」

「主人が」

そして、後ろにいた主人が立ち上がり、私たちの前にやつってきた。
ユウ君の顔が蒼褪めていく。

「まず、話を聞こうか。 警察へ行くはその後だ」と、主人。

第189話 これで良かつたのか

彼女からメールが来た。

『主人に話したわ』

彼女の旦那が雄一と会い、一度と近づかない様に話をつけたと言つ。僕はその後、彼女が旦那と気まずくなつてはいけないか心配だつた。

『大丈夫。今まで通り』

彼女は言つた。

雄一から連絡があつた。

田舎に帰つて家業を継ぐことになつたと言つ。実際のところは判らない。

その後、確かに家も引っ越したようだし、電話もつながらない。これで良かつたのか。

これで良かつた！

そう思うしかない。

第190話 夫婦の関係

「ありがとう」

私は今回の件で主人を見直した。
ところが主人は私にこう言つた。

「勘違いするな」

冷たい視線で私を見下す主人。

「女房に変な噂が立つたら俺の立場がない」

結局、自分の面子しか考えていなかつた。
私たちは夫婦としてはもう終わつてゐる。

彼の顔が浮かぶ。

小言を並べる主人の声はもう耳に入つてこない。
もつすぐ彼の誕生日…。

最後の言葉だけが耳をこじ開けた。

「…なよ」

「えつ？」

「もう夜は出歩くなよ」

そんな…。

第191話 約束

『金曜日の夜は一人で過ごしたい』

彼からのメール。

そう…。

彼の誕生日だもの。
私もそうしたい。

私は彼に電話を掛けた。
そして、事情を話した。

『昼間ならどう?』

彼が言う。

「だつて、仕事じゃあ…」

『休む』

「そんなの悪いですよ」

『大丈夫! 調整できる』

私たちは子供が学校に行っている間だけ一緒に過ごすこととした。

木曜日。

珍しく主人が早く帰ってきた。

「明日は休みになったから、みんなで映画でも見に行くか?」
「えつ!」

第192話 先約は

『「めんなさい。会えなくなりました
彼女がメールで事情を伝えて来た。
仕方ない。

僕はいつも通り出社した。

「川村さん、休みじゃなかつたの?
と、若い女子社員。

「うん…。ちょっと予定が変わってね
「今日つて、川村さんの誕生日ですよね
「良く知ってるね
「お祝いしてあげましょつか?」
「遠慮しておくよ
「先約があるのね
「そうではないけど…」
「だったら、いいじやないですか」

平瀬みゆきは強引に決めてしまった。

第193話 一人きりの時間

「学校が終わつたら早く帰つてこいよ
そつ言つて子供たちを見送る主人。

平日の昼間に主人と二人きり。
落ち着かない。
息が詰まる。

主人は食事がすむと新聞を広げた。
私はいつも通りに家事をこなしていく。
テレビからはタレントの不倫を伝える、お馴染みのレポーターの声。

私はドキドキしながら掃除機をかける。
主人がテレビを消して立ち上がつた。
「DVD借りてくる」

主人が出掛けるとホッとした。
同時にポケットの携帯が鳴つた。

第194話 彼女以外の女性とは

若いと言つても30は過ぎてゐる。

しかし、平均年齢が高い我が社にあつては格段に若い。
そして独身。

みゆきはパソコンに待ち合わせ場所を指定してきた。
僕はまだ決めかねている。

いい子だとは思う。

声をかけられて悪い気はしない。

けれど、彼女以外の女性と一人で会つ氣にはなれなかつた。

ふと、睦美の顔が浮かんだ。

思わず苦笑い。

あいつは別（女じやない）だな。

そつ思ひと余計に彼女に会いたくなつた。

僕は携帯電話を手にした。

第195話 困らせないで

『会いたい…』

彼からのメール。

分かっているわ。
私も会いたい。
だけど今日は無理。
トシちゃん、困らせないで。

『主人がいるの』

彼なら分かってくれる。

そう思つて彼に返信した。

きっと主人は借りてきたＤＶＤを見ながら、子供達が帰つて来るまで時間をつぶすだろう。

私には外に出る理由がないもの。

今、主人に不信感を抱かれるのはまずい。

『ゴメン』

彼のその一言で、肩を落としてがっかりしている姿が目に浮かぶ。

『めんなさい…』。

第196話 結局、彼女を困らせただけ

まるで駄々っ子だ。

つべづべしつつ思つた。

自分のことしか考えていない。

結局、彼女を困らせてしまつただけだ。
もう、仕事も手につかない。

元々休暇を取つてゐる。

今日はこのまま帰らひ。

パソコンを閉じて上着を手に取る。
席を立つとみゆきが飛んできた。

「出掛けますか？」

「こや、今日はもう帰る」

「もうですか…。では後ほど」

そつと言つてみゆきは立ち去つた。

まるで断られたことを拒むよつ。

参つたなあ…。

どう断るつか…。

第197話　主人の口からそんな言葉が出るとは思わなかつた

「久しぶりに一人で外食しよう」

主人の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかつた。

新作のDVDを見終わると、昼だつた。

昼食の支度をはじめようとした私に主人が声をかけたのだ。

近くのファミレスへ一人で行つた。

知り合いが何人かいた。

「あら！　どちら？」

声をかけて来たのはバレーのクラブチームの先輩。

「主人です」

私が紹介すると主人は会釈をした。

「まあ！　仲がいいのね」

彼女はそう言うとサラダバーの方へ歩いて行つた。

第198話 地元の付き合い

「誰？」

主人に聞かれた。

「バレーの先輩」

私は答えた。

「けつこう知り合いが多いんだな」

「ええ。ずっとここにいるんですもの」

「平日の昼間に地元にいるのは、新鮮な感じがする」

「そつかしら？」

「今まで、地元の付き合いはなかつたからな」

「地元の付き合いに興味があるの？」

「お前は楽しそうだ」

「仕方なくお付き合いしているだけよ」

「そうなの？」

「ええ。興味あるなら町会の人を紹介してあげましょうか？」

「いや、いい」

第199話 家族に必要なもの

あの人は何かを探ろうとしている。
私の考えすぎならしいのだけれど。

主人は家に帰ると、もう一本のDVDを見始めた。
ちょうどそれが終わつた頃、子供達が帰つてきた。

映画を見て食事をした。

家族4人で出かけたのは久しぶりだ。
子供達はそれなりに楽しそうにしていたけど、どこか冷めたところ
もある。

主人は一人ではしゃいでいた。

まるで、いい父親であることを見せつけるかの様に。
この家には自分が必要なんだと言わんばかりに。

第200話 孤独

結局、僕はみゆきが指定した店に行つた。

しかし、どうしても彼女の顔が頭から離れない。

みゆきは色々と話しかけてくれているのだが、何も耳に入らない。

彼女に会えるわけではないので適当にみゆきの相手をするのも悪くはないと思つた。

でも、それは逆にみゆきに対して失礼だ。

「ごめん。 今度、埋め合わせをするから」

そう言って僕はテーブルに金を置き店を出た。

彼女に会えないことが、こんなに自分を孤独にするのだと思い知つた。

第201話 一人で眠る夜

一人で眠るのがこれほど寂しいとは知らなかつた。
昨日までは彼女の顔を思い浮かべて眠れば楽しい夢が見られるよう
な気がしていた。

この年になつて誕生日をこれだけ意識するなんて…。

真夜中、寝付けずにタバコを吸おうと思つたが、あいにく空っぽだ
つた。

仕方がないのでコンビニまで出掛けた。
店の外でタバコに火を付けた。

空に向かって溜息と共に思いつきり煙を吐き出した。

「トシさん?」

聞きなれた声。

振り向く。

彼女がいた。

第202話 寒い夜に

主人と子供達が寝てからシャワーを浴びた。

髪が乾くまで紅茶を飲みながらボーッとしていた。

無意識にタバコの手を伸ばす。

空っぽだった。

無いと思うと、何だか余計に吸いたくなつた。

濡れた髪を帽子に押し込んで外に出た。
かなり寒かった。

上着を着てくれば良かつたと後悔した。
でも、コンビニはすぐそこだ。

コンビニの灯りが温かく感じられた。

入り口でタバコを吸つている人影が見えた。
えっ！

あれはもしかして…。

「トシさん？」

第203話 なんという偶然

なんという偶然なんだろう！

僕は思わず時計を見た。

11時55分。

何だかとても嬉しくなった。

「買い物？」

「はい。タバコが切れちゃって」

「僕も…」

「お誕生日めでとうござります」

「うん。間に合つた」

僕はそう言つて店の中の時計を示した。

「ギリギリでした」

そして、日付が変わつた。

「会えてうれしい」

僕が言うと彼女は笑顔で応えてくれた。

「はいー！」

彼女がタバコを買ってくるのを待つて、僕はもう一本タバコに火を付けた。

第204話 僕達には許されない

ここは人目につく…。

コンビニの前で立ち話なんて、何も不自然なことではない。
だけど僕達にはそれさえも許されない。

このタバコを吸い終わったら帰ろう。

吸い終わったタバコを吸いガラ入れにこすりつけた。

「じゃあ

そして彼女に背を向けた。

振り向かずにそのまま家に帰った。

家に帰ると陽子が起きていた。

「コーヒー飲む?」

「うん」

陽子はテーブルに「コーヒー カップを置いた。

そしてこう言った。

「パパ、お誕生日おめでとう!」

第205話 風は冷たいけれど、心は温かい

彼の姿が見えなくなるのを待たずに私もその場を後にした。

風が冷たい。

体もだいぶ冷えて来た。

でも、心は温かい。

家に帰つてから、もう1本タバコに火を付けた。

飲みかけの紅茶は冷めていた。

紅茶を入れ直して一口すすつた。

冷えた体に温もりが戻ってきた。

日曜日にはソフトボールの練習がある。

その時だけは、堂々と彼に会える。

だけど、会えるだけ…。

どうしても、みんなの目を意識してしまつ。

自分でもおどかしいのだけれど…。

第206話 彼女はひつ思つてこぬのだから…

「最近、あいつウザいな」

茂が言つた。

橋浦がやたらと彼女にソフトのことを教えている。イチローが練習に来なくなつてから特に田につく。そう言へば、僕が彼女にアドバイスをすると、それを否定するようなことを言つ。

二人は付き合いが古いから、仲がいいのはみんな知つてゐる。当然、友達同士としてなのだが、このところ、その域を超えているように見えると茂が言つ。

ヤツのことはどうでもいい。

彼女はどう思つてゐるのだね…。

第207話 母親以前に一人の魅力的な女性なんだ

「あの人は前からそだから」

彼女が言った。

そんなことは分かっている。

僕は彼女に最近のみんなの見る目が違つてきていることを伝えた。

「どうしていつもそうなの？」

彼女の表情が曇る。

そして、周りが自分を女としてしか見ないことが情けないと言った。

本当にその通りだと思う。

確かに彼女は家庭のある主婦であり母親だ。

そして、ソフトボールのチームメイトもある。

だけど、それ以上に彼女はとても魅力的な女性でもあるんだ。

「それは違うよ
と、彼女。

他のチームにも素敵な女性がいるのにウチみたいな陰口なんか聞いたことがないと。

確かにそうだ。

でもね、彼女たちとみいことでは決定的に違うところがあるんだ。
みいこは本当に女の子らしい。

彼女達も見かけはキレイだけど中身が“おやじ”なんだ。
そして、夫婦でソフトをやつしていくこと。
これがいちばん大きい。

「分からない」

彼女はそう言つけれど、分からなくともいい。
今のみいこが僕は好きだから。

第209話 彼女の背中が小さく見える

午前中の練習が終わると、みんなで食事に行くのがソフト部の慣例になっている。

もちろん、行きたい者だけで行く。

彼女はいつも付き合ってくれていた。

「無理はしなくてもいいよ」

僕はそう言って、彼女に目配せをした。

ダンナとのことは彼女から報告を受けていた。

本当は少しでも一緒にいたい。

だけど、田先のことにこだわってすべてを台無しにしたくはない。

「じゃあ、今日はこれで…」

一人で帰つて行く彼女の背中が小さく見える。

第210話 いい加減にしろ！

「「めん、今日は俺もバス」
そつ言つて帰つて行つたのは橋浦。

いつもの定食屋。

茂が切り出す。

「やつぱりな

「何が？」

克也が聞く。

「あの二人、あやしくねえ？」

「あやしこう？」

「最近、いつも一人でいなくなるよな

「そういうことなの？」

まずい流れだ。

完全に誤解されてる…。

「偶然だつて」

僕は否定したが茂は反論する。

「お前は人が良すぎる」

克也が言つ。

「俺はてつきり川村さんがなつちゃんの…」

「いい加減にしろよ」

第211話 いつもよりバッグが重い…

今日はいつもよりバッグが重たい。

お昼にはんくらいなら、いいと思うのだけれど…。
でも、彼の気遣いはありがたい。

今日は主人が家にいるから。

突然、携帯電話が鳴った。

彼からだわ。

あれつ？ 橋浦さん？

『今からちょっとといい?』

何かしら…。

私は家に帰る前に橋浦さんが指定した店に行つた。

「川村さんと付き合つのはやめろ

「えつ？」

「付き合つてんだろう?」

「そんなことはない…」

「イチローさんから聞いて全部知つてんだぞ」

第212話 私も好きです！

そのことをまた蒸し返すの？
信じられない！

私は何も答えずに立ち上がった。

「逃げるのかよ」

橋浦さんが怒鳴った。

周りの客達がこっちを見る。

私は席について橋浦さんに言った。

「イチローさんに何を聞いたかは知らないけれど、橋浦さんがそんなことを言う人だとは思わなかつたわ」
私が強く出ると橋浦さん態度を変えた。

「俺はお前が心配なんだ。 実際、川村さんはお前のことが好きだよ

「ええ、私も好きですよ。 尊敬しますから」

第213話 信じられないなら、呼び付けないで！

彼は睡然としている。

「本当にそれだけ？」

「それ以外に何があるって言つて？」

彼はバツが悪くなつたようだ。

私は追い打ちをかけるように続けた。

「私の言つことが信じられないのなら、呼び付けたりしないで！
イチローさんと仲良くやつていればいいのよ」

これにはさすがに彼も参ったみたい。

私は時間をかけて彼を説得した。
彼もようやく理解してくれた。

そして一人で店を出た。

「あれ？？」

その時、克也さんがそこを通りかかった。

第214話 何かがおかしくなっている

『やつぱり茂ちゃんの言つ通りだよ』

克也からのメール。

僕達が飯を食つて いる間に一人で会つて いたところなのだ。
まさか…。

そうだと しても理由があるはずだ。

そう思いたい。

でも、心の中の不安が隠しきれない。

そんな矢先、彼女からメールが来た。

橋浦に呼びつけられて責められたから、話しあつたところだつた。

しかし、素直に信じられない。

克也に見られて言い訳しているのではないか…。

ダメだ。

何かがおかしくなっている…。

第215話 後の言葉が出てこない

まさか、克也さんに見られるなんて。
変に思われなかつたかしら。

私はすぐに彼にメールした。
メールした後で後悔した。
何か言い訳みたいに思われるかも。
でも、彼を信じよう。

家に帰ると主人が不機嫌になつていた。
「遅かったな」
「みんなでご飯食べて來たから」
「二人だけじゃ、みんなとは言わないんじゃないのか?」
「えつ?」
「背番号7。増田の奥さんが見たつてよ」
「違うの...」
「何が違うんだ?」
その後の言葉が出てこない...。

第216話　冷静になれ、そして良く考えろ

冷静になろう。

良く考えて答えるの。

背番号7は橋浦さん。

増田さんの奥さんに見られていたのは予想外で最悪だ。一緒にいたのがトシさんじゃなくて良かった。

橋浦さんなら主人も知っている。

子供達もよく知っているし、主人の前でも日常の会話として話題になつたこともある。

私は食事の後、幹事の彼と忘年会の打合せをしたと話した。主人は納得したようだ。

「気を付けろよ。　お前は何かと目立つみたいだから」

私は胸をなでおろした。

第217話 やつと思つてやる気がしない

もつすぐ忘年会。

僕は幹事としての連絡を隨時メンバーに入れている。
必要に応じて返信を義務付けている。

最近は彼女からそういうメールに対しても返事がない。

返事がなくても来るのは分かっているから気にもしていなかつた。
今ではそんなことまでもが急に気になり始めた。

やつ言えば、このところ一人だけでは会わなくなつた。

彼女の気持ちが僕から離れて行つてゐるのではないか…。
そう思つと、何もかもやる気がしなくなつてきた。

第218話 すれ違い

もうすぐバレー ボールの地区大会。

出欠の確認や問い合わせのメールが山ほど来る。

その対応をしていると、プライベートな時間がすべて削られる。

トシさんからのメール。

内容は分かつていてるわ。

既に返事はしてある。

ごめんなさい。

後で見るね。

それよりも、こっちの返信。

バレーの大会前はいつもこんな調子。

そう言えども、橋浦さんの件でトシさんからの返信がないわね……。

いつもはすぐに励ましのメールが届くのに……。

彼も忙しいのね。

第219話 例えよひのない不安

彼女の気持ちが僕から離れて行くのを僕にはどういひする権利などない。

けれど、それを確認することくらいは許されるだろうか。

何があつても変わらないはずだった。

彼女に対する僕の気持ち。

今でも彼女が愛おしい。

彼女さえ存在していくれるのなら僕はそれだけといはずだった。

ただの噂。

分かつてゐるのだけれど割り切れない。

例えようのないこの不安。

いてもたつてもいられず、僕は彼女にメールをした。
いや、してしまった。

第220話 えつ・むうこひーと?

バレーの連絡が一段落ついた。

トシさんのメールを確認しよう。

ソフトの連絡、忘年会の連絡、そして、もうひとつ…。

えつ？

どうこうとかしら…。

最後のメールにはこう書かれていた。

『僕は君にとつて期待外れだつたかな？君の気持ちが僕から離れて
いるのは分かつて。それでも僕の気持ちは変わらないよ。だけど、
君が嫌ならいつでも振つてくれていいいよ。僕は君に会えて本当に幸
せだった。今までありがとつ…』

トシさん、違うよ。

第221話 えつ？ まいにち…

ちやんと話をしなくひま…。

だけど、今日はもうこんな時間。

時計を見ると既に日付が変わったとしている。

明日電話じみつ。

翌日、昼休みを見計りつて彼に電話をかけた。

「浅井です」

『なつちやん?』

えつ?

女性の声。

『間違つてゐよ。これ、パパの電話だよ』

陽子わん…。

陽子さんは自分への連絡を、間違えてトシさんの電話にしてしまつてこらし。

ある意味、ホッとした。

でも、どうして彼の電話を陽子さんが持つてゐるのかしら…。

第222話 彼は大丈夫なのかしら

「でも、陽子さんが出てくれて、あつらじ良かつたです。私は陽子さんの勘違いに合わせて話を取り繕つた。

「（）主人はお休みなんですか？」

「どうして？」

「電話が家にあるんですね。おかげで私はラッキーでしたけど……」「それがね……」

陽子さんの話によると、昨夜、トシさんは喧嘩の仲裁に入つて殴られたのだと言つた。

「大丈夫なんですか？」

「ええ！ なつちゃん、心配？」

そう聞かれて焦つた。

もちろん心配に決まつていいけれど……。

第223話 とんだ災難

「折れますね。
下顎骨骨折ですね」
そう診察された。

昨夜、彼女にメールした後、女性が一人の男に絡まれているところ
に出くわした。

様子が尋常ではなかつたので仲裁に入つた。
男の一人が殴りかかってきた。

突然だつたので、まともに喰らつた。

男はその後も、容赦なく殴りかかってきた。

以降は全て防御したけれど、最初の一発で下あごが折れてしまつた
らしい。

翌朝になつても痛みが引かず、会社を休んで病院に來た。

第224話 今は待つしかない

大丈夫かしら…。

陽子さんは大したことはないと言つていたけれど。

心配でたまらない。

でも、今、彼は携帯電話を持つていない。

彼が連絡をしてくれるのを待つしかない。

夕方、携帯電話が鳴つた。

私はすぐに発信者の名前を確認した。

茂さんだ。

『トシが骨折したらしいぞ』

そう知らせてくれた。

事情が事情だけに落ち込んでいると言つ。励ますために、一席設けるから来てほしいと言われた。もちろん、すぐにOKした。

骨折だなんて…。

第225話 君の笑顔がいちばんの薬

店に行くと、既に茂さんがいた。
他の人もトシさんもまだ来ていなかつた。

「お疲れ！」

茂さんが手を振つて会図してくれた。

「お疲れ様です。みんなまだ来てないんですね」

私はそう言いながら、茂さんの向かい側の席に着いた。

「俺りだけだよ」

「えっ？」

「他の奴には話しねーい」

「どうして……」

「今あいつには、君の笑顔がいちばんの薬なんだ」

「そんなことないですよ」

「なつちやんつて、トシのこと好き?」

茂さん、何を聞くの?

第226話 バカ！ でも嬉しい

「あいつはなつかやんのことが好きみたいだ」「茂さんめざむしてこんな話をするのかしら…。

「そんなことないですよ」

私は話をばぐらかそうとした。

すると、茂さんは彼からのメールを見させてくれた。そこには怪我の経緯が詳細に書かれていた。そして最後に、こう書かれていた。

『…とにかく、体中が痛い。明日の朝、生きていかないかも。後に浅井さんの顔が見たかったなあ…』

「トシのやつ、バカだよな」

本当にバカ！
でも、嬉しいよ！

第227話 彼女の目が潤んでる

まったく…。

怪我人を呼び出すなんて、何考えてるんだ？

僕はそう思いながら、茂の待つ店に行つた。いつもの座敷の壁際には茂が座っていた。近づくと、茂の向かいに彼女がいた。僕は座敷に上がるのを少しためらつた。

「ほら！ いちばんの薬を持ってきてやつたぞ」
茂がニヤニヤしながら言つ。

彼女の目が潤んでいる。

「どうした？ 茂にイジメられた？」

僕はそう言いながら茂の隣に座つた。

その瞬間、彼女のオシボリが僕の顔に飛んできた。

第228話 薬の効き目

人の気も知らないで！

良くそんなことが言えるわね…。

そう思った時には彼にオシボリを投げつけていた。

しまった！

だけど遅かった。

彼が顔を押さえて苦悶の表情を浮かべている。

骨折しているところに当たつたみたい。

「『めんなさい！ 大丈夫ですか？』

本当に泣きたい…。

私は何をやつてているんだろう。

「大丈夫！」

彼は笑いながらそう言った。

そして、続けた。

「せつかくの薬がそんな顔をしていたら効き目がなくなるよ

トシさん…。

第229話 むりして謝るの？

その後は怪我の経緯についてトシちゃんが話してくれた。

でも、思つたほど骨折の状態がひどくなくて良かつた。
顔の半分はすごく腫れているけれど。

ただ、口が開けられないみたいで食べるのが大変そう。

しばらくして茂さんが席を立つた。

私は思い切つて彼に聞いた。

「どうしてあんなメールをしたんですか？」

「あんなって？」

「私の気持ちが離れてるって……」

「……」

彼は少しの間黙り込んだ。

そして、一言。

「『めん』

どうして謝るの？

第230話 言葉で伝えることの大切さ

「どうして謝るんですか？」

私は不安だった。

気持ちが離れているのは彼の方だと思った。

すると、彼は照れたように笑って話し始めた。

「まだまだ修行が足りないね…」

嫉妬、不安、焦り、色んなことを考えてしまい、本来の純粋な気持ちを忘れかけていたことなど、丁寧に話してくれた。

私にも責任があるかもしれない。

私はいつも言葉が足りない。

だから誤解されやすい。

きちんと言葉で伝えることがどんなに大切なことかを思い知った。

第231話 彼の気持ちが分かつてホッとした

茂さんが戻ってきた。

入れ替わりにトシさんが席を立つた。

「どうした？ 告白された？」

茂さんが聞いてきた。

「何を言つてるんですか！ 私たち、みんな家庭があるんですよ」

私は少し強い口調で言い返した。

すると、茂さんは気まずそうに謝った。

でも、彼の気持ちが分かつて私はホッとした。

今日は予定外だったので、そろそろ帰らなければならない。

私は一人を残して先に店を出た。

残った二人がどんな話をするのか気にはなつたけれど。

第232話 最終的に迷惑がかかるのは…

「少しは気が晴れたか？」

茂が言った。

僕は茂がこんな飛び道具を使える男だと初めて知った。

「余計なことして…」

とはいって、今日は茂に感謝している。

それは認めよう。

「まあ、お前にしちゃあ気が利いたな」

「だらうへ。なっちゃんもお前のこと好きだぞ」

「そういう話はなるべくするな。最終的にいちばん迷惑がかかるのはあの子なんだから」

「そうだな…」

茂はそう言って、すこし神妙な面持ちになつた。さすがの茂も理解したようだ。

第233話 僕は“こじか”

「動物占いって知ってる?」

質問したのは行き付けのスナックのママだ。

聞いたことはある。

そう答えると、ママは僕の生年月日聞いた。
生年月日で12種類のキャラクターに分かれるのだそうだ。
それが絶妙にその人の性格を言い当てているのだとか。

ママが僕のキャラを調べる。

そして吹き出した。

「川村さん、こじかだつて!」

でも、当たつていると言つ。

僕はママから本を借りて読んでみた。
確かにあたつていると悟つた。

みじか。

第234話 彼女は“チータ”

僕は自然と彼女の生年月日をキャラクター決定の早見表に当てはめてみた。

彼女のキャラクターは…。
チータだ。

プライドが高く負けず嫌い。
負ける勝負はしない。

立ち直りが早い。

一目惚れが多い。

情熱的な悪女。

恋は障害が多いほど燃える。

等々。

まいこにぴったりだ。

僕はそう思った。

僕との相性は…。

『活動的な彼女を彼が優しく突き放して絶妙なバランス』

僕は彼女を突き放したりしない…。
と思いつつ、笑みがこぼれた。

第235話 大丈夫よ！誰にも言わないから

僕の表情を見てママが口を挟んだ。

「いい人との相性が良かつたのかしら？」

僕は正直に、そうだと言つた。

「それって前に連れて來た子？」

そう言えば一度だけ彼女をここに連れて來たことがある。

その問い合わせに僕は返事をしなかつた。

しかし、ママは頷いて微笑んだ。

僕がうろたえた表情をしたのでママはすかさず言つた。

「大丈夫よ！ 誰にも言わなきから」

大体、彼女がビニの誰だかもわからないのに言つようがないとも。

動物占いねえ……。

第236話 彼女に勝つてもらいたいなあ……

忘年会の出席率が良くない。

特にボウリングの方は僕を含めて5人だけ。

これじゃあ、団体予約は無理。

この時期、予約なしでは待ち時間がどれくらいになるのか分からぬい。

ボウリング場に断わりの電話を入れると、誕生日予約といつのがあると言つ。

それは人数制限もなくて、待ち時間なしで出来ると言つ。

僕がその月の誕生日だったのでそれで予約をし直した。

女性は新しく入った津山さんとみいこ。
みいこに優勝してもらいたいなあ……。

第237話 真だけ特別扱いは出来ない

「優勝賞品は何がいい?」

人数が少ないので確率は高いと彼が言った。

私は即答した。

「タバコ」

周りが一瞬静まり返る。

そして、あきれた表情。

「なんだよ、色気がねえな」

橋浦さんが言つ。

彼は静かに微笑んでいる。

「いいよ。 それじゃあ、必ず勝つてね」

「ハンドテたくさん下さいね」

「それは無理! 津山さんもいるのに浅井さんだけ特別扱いは出来ないよ」

「私、下手だから」と、津山さん。

こういう人がいちばん信用できないのよね…。

第238話 ストライク！幸先いいぞ…

本当は彼女に100でも200でもハンデをあげたい。
でも、女性は彼女だけじゃない。

津山さんが年嵩なのに若い彼女に多くハンデはあげられない。
結局、一人に50ずつハンデをあげることにした。

彼女が優勝できなくても、ボクが優勝して賞品をあげればいい。

当日。

メンバーが揃つたので受付に行つた。
待ち時間なく、すぐにスタートできた。

トップは僕。

ストライク！

彼女が飛びあがつて喜んでいる。

ハイタッチ。

幸先いいぞ…。

第239話 負けられない

次は私の番。

彼の前だから緊張するけれど、最初の投球は慎重に投げる。
倒れたのは7本だったが、残ったピンもスペアが取りやすい配置だ
った。

二投目、集中してコントロールする。

「よし！」

スペア取つた！

橋浦さんと山下さんは一人とも一投目にミスした。
次は津山さん。

お手並み拝見。

なかなかきれいなフォーム。

ストライク！

両手をあげて真っ先にトシさんのところに行つた。
そしてハイタッチ。

何よあの人…。

でも、負けられない。

第240話 すぐくムカついてきた

「お前たちハンデいらなかつたな」
そう言つたのは橋浦さんと山下さん。

二人はなかなかスペアが取れず、100ペース。
トシさんは好調で180ペースで来ている。
私もスクラッチで150ペース。

そして、気に入らないけれど津山さんも150ペース。
何が『私、下手だから』ですって?
この嘘つき女!

「優勝賞品がタバコだから申し訳ないなあ」
私が言うと彼女は微笑んだ。

「いいのよ。私も同じものを吸うから
すぐくムカついてきた。

第241話 彼が耳元で囁いた

私はますますトシさんのことを見直した。

私たちにハンデが50もなければ優勝は断トツでトシさん。

トシさんは10フレームをストライク、スペアで締めくくり、 18

3。

9フレーム終了時で私と津山さんは互角。

でも、ストライクで終わつた津山さんが有利。

負けたくない。

私は気合を入れ直した。

すると、トシさんが私のそばに来た。

そして、耳元で囁いた。

「優勝賞品はタバコではないから。 タバコは僕が個人的に買ってあげる」「え？」

第242話 まぐれですよ

何だか拍子抜けしちゃった。

でも、気持ちが楽になった。

そのせいか、一投目はストライク。

そして、二投目、三投目もストライク。

215の大台に乗った。

津山さんは一投目でストライクを逃した。
これで、優勝がなくなつた。

その後スペアを取り、最後はストライクで締めくくつ
た。185でスクラッチでもトシさんを上回つて準優勝。

「本当にハンデいらなかつたね」

彼が言った。

「まぐれですよ」

私が言つと、彼は軽くでこپンをした。

第243話 デイズニーだよ

表彰式は忘年会の会場でやる。

まだ時間があるので、一日解散した。

車で来た山下がバスで来た津山さんを送り、橋浦はバイクで帰った。自転車の僕と彼女は一人その場に残された。

「ビックリしたよ」

「本当にまぐれなんです」

「まぐれで出るスコアじゃないよ」

「最後の三つが効いたんですよ。あれはトシさんのおかげです」

「デイズニーだよ」

「はい？」

「優勝賞品だよ。パスポート3枚」

それを聞いた瞬間、彼女が僕の頬にキスをした。

第244話 一回解散

僕は驚いて、思わず顔をそむけた。

「誰かに見られたらどうするんだ！」

ハツとした表情を浮かべ、周りを見渡す彼女。

「嬉しくて、つい…」

「気を付けようって言つたのはみいこの方だよ

「そうですよね」

僕達はそれぞれ、自転車を止めた場所に向かった。
そして、そのまま別々に帰つた。

僕は家に帰ると、キッチンに立つた。

忘年会の差し入れを作るためだ。

このメニューだけは家族のお墨付き。

僕が作ったもの以外は口にしないほどだ。

第245話 帰つてからのお楽しみ

「お母さん、ボウリングどうだった?」

家に帰ると、子供たちが駆け寄ってきた。

私は両手で丶サインをして見せた。

「優勝?」

「優勝!」

子供達は優勝賞品が何か聞いてきた。

当然だろ?。

タバコでなくて本当に良かつた。

“デイズニーパスポート”と言いたかったけど、表彰式がこの後の忘年会だからと内緒にした。

帰つてからのお楽しみよ。

私はシャワーを浴びて、昨夜から下ごしらえをしていたテザートを仕上げた。
差し入れのための。

第246話 ポテトサラダ

「何を作ってるの？」

陽子がキッチンを覗いて言つた。

僕は“ヤバイ”と思つた。

「あっ！ ポテトサラダだ。 ヤッター！」

その声を聞いて娘もキッチンにやつてきた。

ほぼ出来上がったポテトサラダを指でくつくて味見をする娘。

「美味しい！ やっぱりパパのは最高」

そんなに喜んでもらつても、これは…。

僕は出来上がったポテトサラダをタッパーに入れ始めた。

「何してるの？ どこかに持つて行くの？」

指をくわえて見ている娘の視線が痛い。

第247話 寿司桶

僕は差し入れを持って一足早く店に行つた。

「こんちわー！ これ」

そう言ってタッパーを出した。

「あら」

ママが驚いた顔をした。

「僕が作つたんだ。 差し入れに。 適当に盛つて出して」と、ママは指ですくつて一口。

「美味しい！」

僕はテーブルの料理を見た。

寿司桶がある。

「ママ、これ

「いつもお世話になつてるからつてマスターが奮発したのよ

「これじゅあ、赤字じゅないの？」

「大丈夫」

と、ひょっこり顔を出したマスター。

第248話 手編みのポンチョ

彼からのメール。

『今日はお寿司があるから早くおいでの！ 遅れると無くなるよ。あと、僕の手作りのポテトサラダ』

まあ！ それは大変。

私はデザートのチョコを箱に詰めた。

お寿司もだけど、私がいちばん食べたいのはトシさんのポテトサラダ。

私は窓を開けて外の空気を確かめる。
ちょっと寒い。

私は手編みのポンチョを羽織った。

トシさんが“可愛い”って褒めてくれたポンチョ。

「では、行ってきます」

主人が“わかった”と手を振った。

第249話 乾杯！忘年会スタート

あれ以来外出は控えていたので、主人も悪い顔はしていない。

店に着くと、まだトシさんしか来ていなかつた。

彼は幹事なので奥のテーブル席にいた。

私はとりあえず、いちばん入口に近い席に着いた。

間もなく、メンバーが揃つた。

彼が音頭を取つて乾杯した。

その後は、各自の席で、それなりの話題で盛り上がつてゐる。

私の隣には橋浦さん。

橋浦さんは私が移動するのをガードしているような感じに思える。まだ何か疑つているのかしら…。

第250話 彼の周り、私の周り

私以外の女性はみんな彼の周りにいる。
私の周りは男の人ばかり。

これじゃあ、本部の人にもた嫌みを言われそう。
そう思ったところに本部の吉田さんが来てくれた。

「彼女をいじめちゃダメよ」

吉田さんが言った。

「いじめられてるのはこっちだよ」

橋浦さんが言った。

なんか、とげのある言い方。

私は空いたグラスを持って席を立つた。
橋浦さんは自分が作ると言つたけれど、
お酒のセットは彼のテーブルにある。
私は断つて席を移動した。

第251話 ただ純粋に好き それでいい

やつぱり気になる。

橋浦は必ず彼女の隣に座る。

しかも、僕から彼女を遮るよつこ。

絶対勘違いしている。

彼女の話だと、僕達の関係が何でもないといつのは納得したといつことだつたけど…。

その話をしたといつ日以来、なにか変だ。

やめよつー。

余計なことを考えるのはやめよつ。

僕は彼女が好き。

ただ純粋に好き。

それでいい。

彼女がグラスを持つて席を立つた。

橋浦に何か言われているようだけど、無視して来る。

そして、僕の横に来た。

第252話 今はマズイかも

僕の隣で彼女が水割りを作っている。

彼女がチラッと僕の方を見た。

「浅井さん、言つてくれれば作つてあげるのに」

「いいんです。ちょっと散歩がてら席を離れたかったので

すると、僕の前に座つていた吉田さんが言つた。

「あら、やつぱりいじめられているの？」

それを聞いていた小山さんが言つ。

「席代わりましょか？」

小山さんは僕の隣。

だけど、今、僕の隣に座るのはマズイと感じた。

「大丈夫です」

彼女はそう言つて僕を見た。

第253話 表彰式

「じゃあ、表彰式始めよつか?」

彼が言った。

「はい!」

私は頷いた。

「そう言えば、ボウリングはどうだつたんだ?」

と、参加できなかつた茂さん。

「今から発表しますから」

「上位5名まで商品があります。まずは5位から...」
彼は下位から発表していった。

「準優勝は津山さん」

歓声が上がる。

「そして、優勝は... 浅井さん!」

彼が優勝賞品を高々と掲げた。

私は彼の元に賞品を受け取りに行つた。
受け取る時に彼の指が私の指に触れた。

第254話 知つても初めての舞ひ

彼女に賞品を渡すとき、指が触れた。

彼女はとっさに指を引っ込める。

そして、受け取った賞品をみんなの方に向けた

その後スコアを発表した。

「すげえ！」

みんな驚きの表情。

「ハンデ無くても関係なかつたじやん」

「何もらつた？」

と、克也。

彼女はそっと中を覗く。

そして、驚いた表情を作る。

それから、嬉しそうな顔でディズニーチケットを出してみんなに見せた。

最初から中身を知っていても、初めてのようて振る舞う。
それでいい。

第255話 もやか、あいつが…

忘年会の数日後。

彼女からメール。

『電話してもいいですか?』

僕はすぐに自分からかけた。

受話器から彼女の悲しそうな声が聞こえた。

「自転車盗まれちゃった」

その日、彼女が仕事から帰ると、マンションの敷地に雄一がいたと言つ。

彼女は怖くなつて、すぐに部屋に入つたらしい。

その後、買い物に行こうとしたら自転車がなくなつていたといつたのだ。

「悔しいよ…。あの自転車だから余計に悔しい」

雄一が?

田舎に帰つたはずなのに…。

第256話 電話よじ直接会おう

それから僕はタイミングを見計らって、雄一の携帯に電話をかけた。つながった。

雄一はすぐに出了た。

「久しぶり！ 元気か？」

「川村さん、お久しぶりです。電話しようと思つてたんですよ…」

何でも、離婚した奥さんと親権についての話し合いをするため、こ

つちに来ていると書いた。

「…一杯どうですか？」

電話で話すより、直接会った方が探りを入れるのにいい。

酒が入るとあいつはすぐにボロを出す。

僕は静かに話せる場所を指定した。

第257話 ぶち壊し

雄一の口数が多くなってきた。

大分酔つて来たようだ。

「急に引っ越しちゃうから心配したんだぞ」

「何言つてるんですか？全部あいつから聞いて知つてるんでしょう？」

「何のことだ？」

「旦那に呼び出されたんですよ」

雄一は引っ越した経緯を話し始めた。

「奈津美のヤツ…」

そこまで言つと雄一は急に黙り込んだ。

「そのこと、まだ引きずってるのか？」

「そりやそりですよ。おかげで俺の人生ぶち壊しですよ

「それで恨んでるのか？」

第258話 逆恨み

僕は複雑な気持ちだった。

雄一を信じたい。

しかし、それは彼女が嘘をついて居ることにもなる。
どちらかが嘘をついているのは間違いない。

「それで逆恨みしているのか？」

「逆恨み？冗談じゃないですよ。ちょっと仕返ししただけ…

「仕返し？また、何かやったのか？」

雄一の表情が変わった。

「ちょっと困りましたと思つただけです」

「何した？」

雄一は黙つたまま。

「自転車を隠してやりました」「ちょっとひどいことをした」

「…」

第259話 これで一安心 でも…

私は不安だった。
彼がユウちゃんを呂つていてるのを彼のメールで知らされていたからだ。

ユウちゃんが私のことをなんというか…。
きっと、悪口を並べ立てるに決まっている。
彼が真に受けたらどうしよう…。
確かに、私は彼の気を引きたくて少し大げさな話をした。
でも、嘘をついたわけじゃない。

メールの着信音。

彼から。

『雄一が白状した』

ユウちゃんが自転車を盗んだこと喋ったのね。
これで一安心。
でも、他に何を話したのかしり…。

雄一は彼女の困った顔を見てやろうと迷つただけだと言つた。
それで盗んだ後、マンションのそばで様子を見ていたらしく、
暫くしたら自転車は返すつもりだったと。

ところが、隠した場所から自転車が消えていたと言つ。

「知つてたんでしょう？」

と、雄一。

僕が既に彼女から話を聞いていると分かっているようだ。

「無くなつたことは聞いてる」

「俺がやつたと言つたんでしょう？」

「いや、無くなつたとしか聞いてない」

「やうですか

第261話 例え騙されていたとしても僕は彼女を信じる

それまでのパンクの件を雄一は否定した。

彼女も実際に現場を見たわけではないと言っていた。

しかし、この事実を知つてしまつと、雄一の言つことを信じるのは無理だ。

中立の立場で判断しようとしても彼女を疑ふことは出来ない。

例え騙されても僕は彼女を信じるだらう。

「あの子のことはほれ。ビリ考へてもお前になびくとは思えない」と僕は雄一に對して、そつと声をしかけ出来なかつた。

「やつばつ、アイツは川村さんなんですね？」

第262話 齧迫

年が明けた。

早速、彼からメール。

『あけましておめでとう…』

他にも年賀メールが大量に来ている。

その中に違うメールが数件まぎれていった。
ユウ君からだつた。

『俺がいなくなつたと思つていい氣になるなよ…』
そんな齧しともとれる内容のものばかりだつた。

私はすぐに削除した。

夜になると、何度も電話がかかってきた。
こんな状況でユウ君とはまともな話になるわけがない。
まして、家族と居るときに出られない。
私は電源を切つた。

第263話 意を決して

翌朝、携帯の電源を入れた。

ユウ君からの着信が20件以上もあった。

留守電のメッセージも数件入っていた。

『無視してんじゃねえよ！お前のやつてしるじ、全部ぱみゅあれ…』
かなり酔っているようだった。

私は意を決してユウ君に電話をした。

「どうこうつもりなんですか…」

『俺と結婚してくれ…』

そのために離婚したと言った。

『川村さんはお前とは結婚しない…』

私は絶句した。

そして、電話を切った。

この人は何を考えているの…。

第264話 もへ、うさわつ…

正月の三が日中、そんなことの繰り返しだった。夜中に電話をするのだけは、やめてもらつた。

自分がどれだけ嫌われているのかコウ君は分かつてない。それ以前に私にだつて家族がある。

トシさんはお互いにそれを踏まえて交際している。離婚したから結婚しろなんて、頭がおかしいとしか思えない。

またメールが来た。

もううんざり…。

でも、今度は彼からだつた。

『待ちくたびれた…』

そういうえば、年賀メールの返信をまだしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135u/>

好きになってもいいですか？

2012年1月10日15時56分発行